
竜と書いてドラゴンと呼ぶ！

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜と書いてドラゴンと呼ぶ！

【著者】

NO699B

【作者名】

雨月

【あらすじ】

高校に入学したある少年はある日、ある竜と出会った。

竜が蛇に見えたある日

一、

俺の名前は白川 輝。高校一年生だ。といっても昨日からだけ。そして、今はかなり大変なことに遭遇している。まずはこのことについて説明しよう。

初めての高校の授業をボーッとしながら終えるとすぐに学校を出た。中学のときは部活にはいっていたが今はちょっとと面倒くさいのだ。それと予習なんかでいろいろと時間は必要なのである。家に続く河川敷を早足で歩き家を手指す。左を流れている大きな川をちらりと眺めた。そして、近くに橋がかかっており、その下にいつも見ないような光景があつた気がした。

「・・・・？」

人間、なかなか好奇心には勝てないものである。俺もその類の人間らしく、気になったので橋の下におりてみた。

それは、暗い青色をした大きな蛇に見えた。

そんなこんなで俺は今、睨み合いでいるわけである。・・・
不本意ながら・・・

そいつはよくよく見たら蛇といつも竜の形をしてころむことに気が付いた。頭には角が生えているし、手足だってある。田の前で火でも噴いてくれたら完璧なのだが・・・

じゅり

今まで俺の目を見ていた謎の・・・やはり蛇より竜にしよう。謎の竜は俺のかけているかばんに目をやつた。ちなみに、俺のかばんの中に入っているものは次のものである。

勉強道具に筆記用具、そして先ほど友人からもらつたパンである。

ぐううう

「ここの間の抜けた音が聞こえた。今の音は俺が出した音ではない。まさしく今、俺の前に立つてある竜が出したものであろう。つまり、この竜は勉強がしたいわけではなく、お腹がすいているのだ。今の俺にパンは必要ない・・・わけでもないが別にいいだろ。俺は動物が好きだ! (もつとも、竜が動物に入るかわからないが・・・) 鞄からクリーミパンを出して竜の前に放り投げる。手に乗せて差し出した日には間違いなく腕ごと持つていかれるに違いない。

竜は匂いを嗅いでそのパンをくわえぱくりと食べ終えた。俺はその隙に竜から離れる。今のでパンは打ち止め、竜がまだ腹をすかせているなら今度あの口に納まるのは多分俺に違いない。まだ俺は高校一年だ。恋だつてしまいたいお年頃なのだ。入学早々、幻獣に食われて死にたくはない。

案の定、竜は俺を再び見つめてきた。

鞄の中にはすでに食べ物はないと知つてゐるのか俺を上から下までなめるように見てくる。そんなに見ると緊張してしまう。自分では食べられたらおいしいと思う、なぜなら食べられてもおいしくないなら食べられ損だ。俺としてはおいしく食べてもらいたい。ちなみに一口サイズで食べてくれる相手がいいなあ。

竜は後ずさりしていた俺に迫つてくる。ああ、お父様、お母様、息子は大きくなつておいしく食べられるよう・・・こんな時は騒がず焦らずしなければいけない。ま、目をつぶるぐらいは神様も許してくれるはずだ。好奇心は人を殺すことができる俺はこのと

き実感したね。

世の中、何がある?

竜が蛇に見えたある日（後書き）

ある日、僕の自転車の中に蛇がぐるぐるを巻いていました。見つめ合ふこと数分、その蛇は僕の前からいなくなりました。さて、どうだつたでしょうか？試しに書いてしまったようなものです、面白いと感じてくれた人がいたらうれしいです。ご意見、ご感想を出来ればお願いしますね。

おばれこはれおばれん

二、

「…………」

「輝さん、起きて下さい。誰かが下から呼んでますよ。」

「…………ん？？」

寝ぼけているのか知らないが俺の目に映る人物を俺は知らない。俺の目に映る少女を知るわけがない。俺には妹などいないし、姉もない。ちなみに兄もいないし弟もいない。更に言うと彼女もいないのだ。というより知り合いの女子もほとんどいない。

「…………どちら様で？」

「なに言つているんですか？私を連れてきたのはあなたですよ。」

「…………俺が女の子を家に入れた？んな馬鹿な事があるわけがない。いや、事実嬉しいのだが、俺は人知れずに犯罪を犯すような人間ではない……と思つていてる。

「もう忘れたんですか？パンをくれたじゃないですか？」

パンで女の子が口説けるなら安いもの……？ん？ま、まさかこの女の子は……もしかして……

「・・・俺が・・・連れて来た竜?」

「はい、そうです。」

・・・あつさりしているなあ。なんて人だ。いや、竜だ。竜はみんなこんなにあつさりしているのか?

「というより・・・早く膝からぞいてくれませんか?寝るとさから私の上に乗つてたんですよ。」

ああ、だから彼女の顔が横にあるのかあ。通りで柔らかいと思つたよ。いやあ、竜に膝枕されているなんてもしかして人類初か?ま、とりあえずはわつわとどこいうかな?

ベッドの上に座つて今俺の前にいる少女をまじまじと見てみる。うーん、髪型はポニー テールでかなり黒い感じの青色である。うん、意外と胸がでかいなあ・・・じゃなくて・・・

「・・・というよりなんで俺についてきたの?」

「それはですね、初めて私にやさしくしてくれた人間ですからね。これからよろしくお願ひしますね?」

「・・・は、なにを?」の子は何を言つてゐるの?

「・・・何をよろしくお願ひするんですか?」

「はい、これからはずっと一緒にですよ。」

「なんで?」

俺は何か間違いを犯したのか？若さゆえの過ちを犯してしまったのか？それ故にこのような訳の判らん少女を世話をしなければならないのか？すべての責任は・・・俺なのか？

「ま、あなたの家に住む人が許可すれば私はこの家に住むことがありますよ。」

「おお、意外と常識的だあ！…」これは早速おばさんとおじさんに聞いてみよう。

「こりで説明しておぐが俺の母さんと父さんはいないのだ。小さいころ、天に召されてしまった。それ以後俺は爺さんに育てられていたが爺さんがいなくなると爺さんの紹介により血の繋がらない家に送られたのだ。別にいやだとかそんな感じはない。おじさんとおばさんはやさしいし・・・理解もある人物だ。」

「輝さん、そういうえば先ほどから一階であなたを呼んでいる人がいますよ。早く行きましょうよ。」

俺は領いて先に階段を降りる事にした。このかわいそうな竜には悪いがここは俺の家ではないので選択権はおおばさんとおじさんにある。ま、どちらかというならおばさんが決めるに違いない。

「輝、一回呼んだらすぐに降りてここと言つただろう！…またこの前みたいに関節外されたいのかい？」

「はい、『めんなさい』…」

ちなみに今怒っているのはおばさんの方だ。
口は悪いし、口より手が早いときがよくある。
しかし、俺は実はこのおばさんはやさしいことを知っている。

あれは俺が中一のころ、上級生の不良グループにぼくぼくされた時におばさんはその相手に仕返しをしてくれたのだ。そして、優しさ故にその後、俺にいろいろと相手をぼくぼくにする技を教えてくれたのだ。……そりやもう、教えてくれる度に体中に打撲ができてます。ちなみに心配してくれるのはおじさんだけです。

「で、後ろにいる那個あいの子は誰だい？まさかダンボールとかにはいってたんじゃなかろうね？それともなんかものでつづきたのかい？」

うわ、微妙に鋭いなあ。その鋭さは銃刀法違反じゃないだろ？

「はい、私の名前はですね・・・私の名前は・・・」

俺の裾をちょこちよい引っ張つて寄せて耳打ちする。

「名前を決めてくださいよ。」

「えーーなんで？」

うーん、いきなり言われても困る。だが、名前を付けてくれと言われたら付けるしかないだろうなあ。

「・・・葵なよひづくへ。」
あおじ

「・・・ほんとに考えているんですか？」

ちょっと適当だったかと思い、やり直そうともしたがおばさんの耳も鋭かった。

「ほお、葵かいい名前じゃないか。それでその葵ちゃんは輝のなんだい？」

これにて名付け完了。半ば強制的に龍の名前は葵と名付けられたのである。・・・俺のせいじゃないもーん！－俺の声が大きかつたわけじやなくてあのおばさんの耳が悪いんだもーん。

「・・・わ、私はほですね、その、ここに生活したいんですよ。」

「よし、いいだらう。」

・・・・・おいおい、もつと深刻に悩みましょうよ。一行で即決。この人の頭の中はどんな構造になつていてるんでしょう？誰か教えてほしい。

喜んでいる龍を横田で見ていた俺だが、身構えていた。このとおりでもやさしいおば様がただでこんな不得体の知れない少女を家に置くわけがない。

「だが、条件がある。」

ほら来た。きつと凄い奴が待つてたやつ。葵の顔をどことなく緊張しているし、もし葵がその条件を拒否すればおばさんは『気が短いから間違いない』と追い出されてしまつだらう。

「・・・悪いがその輝と同じ部屋だ。今のところ部屋に余裕がないんだよ。」

「はい、ありがとうございます。」

・・・・・わお！それ俺にとってかなり拒否したい条件じゃん。だが、

「……俺が文句をいえばどうなるであろうか？試してみたいがそのときせんが住んでいた橋の下で過ぐすしかないかもしれない……」

「……輝、なんか不満でもあるのかー？」

「い、いえ、おばさんのお優しさに感謝しているくらいでござります！」

「しまったあ……おばさんの前では『おばさん』と呼んでござりなかつたんだあ……」

「ほお、私の年をもう忘れたのかい？私はまだ一十一だ……」

俺は言葉で一発殴られたのである。やつやもへ、もうじきつになつちやいましたよ。

アマゾンジャングル（後編）

顔が怖い人は災難が多い

三、

俺は葵を連れてさつとおばさんがいる所から退いた。逃げたのではない、戦略的撤退だ。勝てない相手に会つたら逃げろ！！勝てない相手には頭を使って勝て！！これがおののおばさんから教えてもらつた二つの極意である。矛盾しているような気がしてならないのは俺だけか？

「さ、私に部屋を案内してください。」

「・・・わざまで居ただろう・・・」

俺はため息を出したい気分だ。夕陽に向かつて走りてえよ。海に向かつて叫びてえよ。こうなつたらやけだ。

「・・・お客様のお部屋はいらっしゃります。」

「いえいえ、どうもあつがとうござります。」

俺は先ほど降りて来た階段を再びあがり自分の部屋の扉を開ける。

「ひいらがお部屋となつておつます。どうぞ入りください。」

「ふ〜ん、結構綺麗なんですね。さすが輝さんです。」

何がさすがなのかわからないが俺は葵を先に部屋に入れる。どう考へてもおかしいだらう・・・年頃の男子がいる部屋に女の子を

おぐのは絶対におかしいと思うや。・・・まあ、俺はどちらかといふと一人のほうが好きだ。小さいころから転校の繰り返しだったからな。うん、俺だつたら襲うなんて事はしないだろうね。大体相手が人間じゃないし・・・

「意外に輝さんって細身ですけど筋肉あるんですね?」

「そりやまあ、筋肉ある程度はつけておかないとおばさんからのしつけとやらに対抗できないからな。」

今葵はベッドに座っている。外はまだ夕焼けが残っていて散歩したら楽しいかもしねない・・・」こほ葵と外に出てみよう。

「なあ、散歩しねえか?」

「ええ、いいですよ。」

「うん、あつさりしているのもたまにはいいかもしねないな。俺は葵より先に部屋を出た。なぜだか葵は俺が動かないと動かないようだ。」

やはり外はきれいな夕焼けが出ていた。俺は葵の隣で夕焼けを見ている。そして、葵は俺とまったく逆のほうを見ている。

「・・・・なにしてんだ?」

「輝さん、あれって誘拐じゃないんですか?」

なるほど、葵が指差す方に黒い服を着て白いマスク、サングラスをしている大人が少年を一人車に入れようとしている。身代金目的の誘拐だらうか?

「葵は今すぐ警察に行つてきてくれ。俺はその間に車の番号を見たあとでなんとかするからなーーー！」

「わ、わかりましたーーー！」

俺は少年を今にも連れ去るとしている人物の車のナンバーを覚え、その黒い男に静かに近づく。

「・・・雅彦、何度言つたら早く帰つてくるんだーー外には怖い大人が多いんだぞーー！」

「いやだあ、もっと遊ぶんだあ。」

・・・・・どうやらこれは単なる誘拐事件ではないような気がするのは俺だけだろうか？こうなつたら意を決してたずねるしかない。

「・・・すいません、どうかしたんですか？」

俺がそのように尋ねると少年を抱えていた大人はこいつ答えた。

「ああ、すいませんねえ。ほら、雅彦画素直に言つことを聞いてくれないからお兄ちゃんに迷惑をかけてしまっただろう。」

「だつてまだ家に帰りたくないんだもんーーー！」

大人のほうはため息をついてサングラスとマスクを取つた。俺は少々驚いた。なぜならその顔はかなり凶悪そうでサングラスとマスクをつけていたほうがまだましである。なるほど、何でこのおじさんがこのような格好をしていたかわかった気がする。・・・・でも

「…………すいませんねえ、騒音であなたがたのデーターの邪魔をしてしまって……本当に申し訳ありません。ほら、雅彦も謝りなさい。」

「はー、『めんせこ』……」

少年はやうこつと白ら車に乗った。そしてその顔がとつても怖いおじやんは再び頭を下げて車に乗つて俺の前から姿を消した。

「…………よかつたですね、誘拐じやなくて……」

「…………？」

俺の隣には葵が立つていた。警察に行つたのではなかつたのか？

「びつして警察に行つてないんだ?」

「…………別にいいじゃないですか。そんなことより散歩の続きをしましょうよ。」

今日は本当に無性に疲れる一回だと俺は思ひながら再び歩を出した。そんな俺の隣を葵が今度は俺を見て歩いている。

「…………なんか御用ですか？」

「いえ、なんでもありますよ。」

葵が夕日を見ている可能性はゼロだ。俺がいるまづに見えるのは

からすの集団と電線ぐらこなものである。

「・・・といひで聞きたいんだが・・・おまえは何で橋の下にいたんだ?」

「名付けてくれた輝さんがおまえと呼ばないでください。」

おおつと、これははじめてみる表情だ。 とつても怒りついのよう に見える。まあ、俺のほうも無粋な真似をしたからなあ。

「すまん、それじゃ、改めて聞くがなぜ葵はあの場所にいたんだ?」

「あそこは私が生まれた場所だからですよ。 ただそれだけです。」

葵はいつも度々夕日を見た。 その横顔は綺麗だった・・・
かな?

「んじや、そろそろ帰らつか葵・・・」

「はい、わかりました。」

回れ右をして俺と葵は再び歩き出した。 普段は俺一人が歩く道を
今日は一人で歩いてくる。 こんなことは生まれて初めての事だった。

「のわあ!..」

隣で葵が転ぶ。 その足元にはバナナの皮が転がっていた。 ・・・
バナナの皮で転ぶ奴もはじめて見た。 しかもパンツ丸出しだ。

「いたたたあ。」

「なにやつてんだか・・ほら、掴まれよ。」

俺が差し出した手を葵が掴む。その瞬間になぜだか知らないが葵の頭の中を見たような気がした・・・

今日の夕飯はなにかなあ・・・

うわ、どうでもいいことだ。

「・・・・輝さんのスケベ。」

・・・・どうやら葵の頭の中にも俺の考えていたことが伝わったらしい。ちなみに俺が考えていたことは・・・

やつぱり葵だけにパンツの色も青いんだなあ

もしかしながら俺はだめ人間かもしれない。さつきから葵は俺の顔を見ているし・・・・・

顔が怖い人は災難が多い（後書き）

いやいや、面白いかどうか自分でわからないもんですね。今のところはできるだけ続くようにがんばっていきたいと思います。

動き出したなんかの運命

四、

葵の体を引っ張り起こして俺は手を放そうとしたが、葵は俺の手を放そうとはしなかった。

「何で手を放さないんだよ？」

「別に減るわけじゃないからいいじゃないですか。」

ぐ、もっともな意見だ。反論の余地がねえ・・・。俺がそんなことを考へていると葵が話し掛けってきた。

「私に手を差し伸べてくれる人は今までいなかつたんですよ。だから、私はその手にすがりたいんです。これはいけないことですか？」

なんだ？このなんか難しそうな質問は？イエスかノーで答えればいいのか？

「いや、俺だつて誰かにすがりながら生きている毎日だからな。するがることで関係ができると俺は思つている。」

何気ないことに耳を傾けてんじゃねえの俺？

「そうですか、ありがとうございます。」

お礼まで言われたからうれしいなあ。しかし、手に入れて俺の手をぎゅっと握ってくれるのはうれしいがそりゃちょっと力が強

すがじやねえのか？あたたたたつ！…

「……や、早く夕飯を食べに行きましょ！」

「ああ、そうだな。」

なんだかとつてもいい場面である。「ん、これは来たね。何が来たのか知らないが俺としてはなんかこいつ、心にぐっと来たね。

そして、夕食後。

いやあ、葵のたべっぷりは凄かつたなあ。まだ仕事から帰つてきてないおじさんの分までたべっちゃつたからなあ。ついでに俺のトンカツもいつのまにか皿の上から俺を残して去つてしまつた……。ああ、トンカツよ、おまえのこと忘れない。

「うふうふ。ちょっと食べ過ぎたみたいです。」

「そりゃまああれだけ食べれば苦しいわな。」

今、葵は和室の畳に寝転がつている。お腹はパンパンに膨れている。まるで風船だ。

「ひ、生まれる。」

「何が？」

「輝さんの子ども……」

「呴いていいか？」

まつたくなんて奴だ。お腹をさするの止めたりまつせー。おまえは幸せだろうが俺は腹が減ってるのーー。

「輝さん、死ぬ前に一つだけお願ひ事を聞いてください。」

「なんだ?」

「テレビつけてください。」

・・・パシリか?」ここで文句をいふのも子供くさいので俺は黙つてテレビをつけた。テレビでは明日の天気予報をやつしてみうだ。

「・・・明日の天気は、全国的に晴れる事はないでしょう。多分、雷雨となると思われます。それで、次に雷が落ちる確率です。」

「輝さん、今はここのもあるんですね?」

「いや、俺も見るの初めてだ。」

「・・・・・めとめ座に落ちる可能性は・・10パーセントです。」

・・・・なんだこれ?新手の占いか?

「そして、最も確立が高いのはかに座のあなた!—95パーセントです。」

俺、かに座だあーー!

「あ、私かに座ですよ。」

・・・なんて不吉な前兆だ。こんなもん、あたるわけがない。

「・・・・・じや、俺風呂はいって来る。」

俺は和室を出て風呂に向かつた。こんな不安がぬぐえないときは風呂に入るのが一番だ。

「ふいいい。」

親父くさいと言われそうだが、しょづがない。俺は顔をタオルで拭いて湯船から上がり体を洗おうとした。ギョッとした。

「輝さん、背中流しましょうか？」

「な、何入つてきとんだよーーー。」

見れば扉を開けて葵がこしひらにやつてきてくるではないか！幸か不幸かしろいもやでほとんど見ることせできない。俺は当然のよう後に後ろを向く。

「敵に背中を向けるのはいけないとですよ。」

「いや、裸でくるほうが卑怯だらうつーーもううりょこで風呂から上がるから葵は外にいるよ。」

「遠慮しないでくださいよ。大体裸ではありません。タオルを巻い

てます。」

なるほど、後ろを振り返つてみると葵はタオルを体に巻いている。

「ね、これで安全ですかね？」

「こや、せひ俺には無理だ。じめ、先にあがむわ。」

葵の隣を歩いて出口に向かつ。すると、再び扉が開いた。そこにはおばれんである。立つてこるのはおばれんである。

「いいか、輝。これも修行だ。おまえは女の子に弱いからな。あの女番長の時もまったく抵抗せずにぼくぼくとされたからな。葵でなれることだな。」

そして、俺は覚悟を決めた。

あとは寝るだけとなつたので自分の部屋にあるベッドを眺める。
さて、ここで一つだけ問題がある。

「あ、夕方のように私に覆い被さつてしまへばいい。」

葵が俺のベッドに乗つてゐるのだ。しづかにしつづいたことだらうか?
?まあ、別に何もしなければいいのか?へ、上等だぜーーー。こりなり
ややけだ。

「・・・何もしないでくださいこね?」

「まかせておけ、葵に手を出すわけがなかろう……！」

ふはははは、甘かつたな葵。俺をなめてもうつたら困るぜーっ！
葵、おまえなにやつてんだあ。

「葵、俺を後ろからホールドするな。」

「いいじゃないですか、何か減るんですか？」

俺に一度目の攻撃は通じない。これが俺のこたえだあ！

「減るんだよ、なんか、こう、精神力つてやつがな・・・

「それならもうと減らじてあげますよ。」

その日、俺は心中で悲痛の叫びをあげまくつた。だが、まだまだこの生活は始まつたばかりである。俺はその次の日にそれを知つた。

動き出したなんかの運命（後書き）

えーっと、まだまだ始まつたともいえないですが・・・できるだけ面白くしていきたいと思います。努力はしてみますね。

人生なんてうまくいかない

五、

田を開けるとベッドに寝ていなかつた。俺はどうやら葵により落とされてしまったようだ・・・。その証拠に上から葵の寝息が聞こえる。

・・・・・いや、どうやら葵が俺の体の上に乗っているようだ。

「・・・葵、重いからどうしてくれないか?」

「・・・すう。」

返事もしてくれない。まだ寝ているようだが俺はこのままではおばさんに怒られてしまうのだ。毎朝俺は町内を走らないといけないのだ。これは基礎体力をつけさせるための特訓らしい。

俺は葵をどかしてさつさと立ち上がり着替える。今日は休日なので学校はない。だが、窓の外を見ると雨が降っていた。まだ小雨なので大丈夫だろうと俺は雨具を身につけ外に出た。

「さて、輝さん行きましょうか?」

何故だか知らないが葵までついてきたのだった。さつきまで寝てたと思ったがいつのまにか玄関のところで待っていたので正直驚いた。とりあえず大きな木がある近くの山に登つて降りることにした。

「いやあ、雨はうれしいですねえーー。」

葵はしきりにほしゃぎながら俺の後ろをついてきてくる。朝飯も

まだ食べてないのにあんなにほしゃいでいて疲れないのだろうか？

俺は昨日のことを持っていた。あれは嘘なんかじゃないとのことだと俺は知る。そり、ある程度山を登った時に雷が鳴り出したのだ。

「ひらりん

「輝さん、雷が鳴り始めましたよ。」

「そんな事言わなくてもわかるつで。」

「どうやらかなり近いところで鳴っているようだ。しかし、もう少しで大きな木がある折り返し地点だ。このままでいけば間に合つかもしれない。だが、考えが甘かった。」

がしゃーーん

「・・・輝さん、どうやらここから見える大きな木に雷が落ちたようですね？よかったです、慌てて近づいてなくて・・・今、じろじろじくこんがりなってたかもしませんねえ」

まるで人事みたいだ。ちなみにいうなら死ぬときは葵と一緒にだつたに違いない。うんうん、こんがりなるのはもしかしたらおまえかもな。

俺は好奇心から大きな木を目指して思いつき走り出した。雷がこんなに近くで落ちるなんて生まれてこのかたあつたことがない。木には火がついていたのだが、急に大雨となつたのですぐに消えてしまったようだ。だが、俺の目の前に広がっている光景はそれだ

けではない。

「…………あ、輝さん。」

「…………あ、なんだあれ？」

紫色の塊が、バチバチと音を立て俺たちの前にあるではないか。
・・ちよつど木の中心部分にあるということは間違いなく電気の塊
に違いない。・・・いや、そんな訳ないか？

「あ、あれ動いてますよ。」

紫色の塊はうねうね動いている。そして、俺が近づくとそれはどこかで見たことがあるよつた形になつたのだ。いや、昨日見たばかりだ。

それは、はじめ黄色い蛇に見えた。

「・・・葵、お仲間さんか？」

「いえ、知りませんよ。」

こちらを敵意のこもつた目で睨んでいた。体の周りには戦闘開始の準備が知らないがバチバチと音を立て電気の塊のようなものが浮かんでいる。

・・・・・いつのときはあれだ、手を後頭部の後ろに持つていて相手に向かつてお知りを向けて無抵抗のポーズ！！

葵も真似をしていいようだ。だが、黄色い竜は段々こちらに近づいてくる。その気配は一向に変わつておらず、どうやら機嫌が悪いようだ？

「・・・もしかして・・・木が一発で黒焦げにならなかつたからか?」

「しゃーーー!」

どうやら図星のようだと俺は思った。・・・どんまい。そしてこれは相手が見せた隙に違いなかつた。俺は後ろを向いている状態からまわしげりを竜の顔に打ち込んだ。さうに竜に飛び乗り頭を押さえつけた。

がぶう

竜に腕をかまれた瞬間、体に電気がほとばしつたのを感じて俺は氣を失つた。

「・・・輝、おまえは馬鹿か?」

「・・・つるせえ爺さん。竜に喧嘩を売る馬鹿がどこにいるんじや?」

「正当防衛を主張する。」

「馬鹿者、あれのどじが正当防衛じゃ〜つべん天国に来てみるか?」

「?」

「・・・」めんなさい。

「わかればよろしく。それとわしが頼んだ本を必ず忘れるでないぞ。」

「

「くえくえ、ちなみに聞ぐがあの黄色い魔もじの前みたいに囁えた
ら姿が変わるのか?」

「……わい、試してみたひびひび。」

「『我が名におこし合あ。眞の姿を見せよ。』」

「ちなみに責任はおまえが取れよ。」

「……緋ちゃん、やつこいつは先に行つてくれないか?」

「ふん、青!」才田が……それだから彼女もできんのじやー。わしが
天国のプリティーなお姉ちゃんとスキンシップを取るのが忙しいか
らこれで失礼するわ。」

「うぬせえ、無責任な爺さんなんて早く捕まつねおまえばいこんだ!
!」

「お前さんはすでに一度死んでいる身じやよ。やつさんの電撃をもろ
に心臓に食らったからな。だが、わしが閻魔様に頼んだこの世にと
どめておるのじや。感謝しろよ。」

「……あつがどうぞります。」

「つむ、よひしげ。(実はおまえが来てわしのハーレムを取られた
らたまらんからな。)」

「爺さん、一つ聞いておきたい」とあるんだが……。」

「なんじゃ？天国には天使のお姉ちゃんがいっぱいいるがその中の誰かを彼女にしたいのか？」

「いや、もうじやなくてだな、いつたい竜って何だ？」

「……まあ？」

「どうせんなよ！」

「悪いがわしあはうやらボケちゃったみたいじゃ……それでほのう。シーゴーじや。」

「嘘つけ爺さん……ひ、まちやがれえ……」

耳に誰かの鳴き声が聞こえる。すぐ近くでないているようだが……体が痺れている俺にはわからない。ああ、とっても刺激的な一撃だつたなあ。

電撃とこの古の刺激

六、

田を開けると雨が俺の顔にすごい速さで当たっている。とっても
刺激的だ。というよりかなり痛い。特に肩が・・・

「ああ、輝さん・・・・昨日初めて会ったにもう死ぬなんて・・・
・よつぽど口頃の行いが悪かつたんですね?」

「・・・・勝手に殺すなや・・・・」

俺はす()い力で肩を掴んでいる葵から離れた。近くには金髪の小
さな・・・中学一年生ぐらいに見える少女が倒れている。

「葵、あの子誰?」

「ああ、あれは先程の竜ですよ。輝さんに小さな雷を当てたあと雷
に打たれたようにその場に崩れてあの形になつたんです。」

・・・それまた的確な比喩表現を使つてるじゃないですか・・・
とりあえず俺はなぜだか知らないがあの氣絶しているであろう少女
に謝らないといけない気がした。

「・・・葵、悪いが先に帰つて風呂の準備をしていてくれないか?」

「・・・わかりました。」

葵は素直に従つてくれて山を走つて降りていった。俺は倒れてい

る少女の横に行くとその体を背負つことにした。見た目と違わぬ軽
さである。

「……さて、どうしたものかな？」

未だに体がびりびりしていくいつものように体に力が入らないこ
とに気が付いた。足もなんだか疲れているのか知らないが思うよう
に動いてくれない。しょうがないので雨がやむまでどこかで雨宿り
をすることにした。ちょうどこの黄色い竜がいたところは雨があた
つておらず、そこで休むことにした。

「…………」

隣に降ろした少女は目を覚ましたようだ。ここで詳しく述べの少女
の見た目について彼女が完璧に状況把握できるまで説明させてもら
おづ。

髪は金髪でツインテール。

ああ、こんな子が妹にほしいなあ……じゃなくてだ。

目つきはちょっと鋭い。なかなかかわいい顔をしているのにもつた
いないな……。身長も低いし……俺視線では中学一年ぐらいか
な? 体の発育も遅いみたいだし……幼児体系という奴だ。口っこ
ンな人ならどうにも好きそうな感じである。俺? 俺は好みは……
おっと、隣の電撃少女が俺の存在に気が付いたようだ。

「……ありつたけの電気を流し込んだのに死んでないなんて……

・・・

その鋭い目を思いつきり見開いて俺を見ている。どうやら俺をマ
ジである世に送るつもりだつたらしい……。ああ、俺は天国と地
獄、どちらに行つてただろうか?

「おあいこくとも、そつ簡単に俺は死なないみたいだからね。」

「……私を誘拐しても身代金は一切でないわよ。」

「うわーの敵意剥き出しの少女は力を使い果たしたようだ。俺から離れようとしているがまったく力が入らないらしい。」

「……いや、別に金がほしいわけじゃないぞ。」

「じゃ、じゃあ……おやか……私が目的…?」

いや、俺としては遠慮しておひ。ところより願いをげだ。

「……俺は少女趣味じゃないからね。むしろ迷惑だ。そんなことよつお前はいったいなんだ?」

「雷よ。ちゅうと前まではね……」

そりゃまあ、あの大木を木炭みたいにしたところを見るとあながち嘘ではないと思つただが……。

「雷は監査も晴らしをする為に地上に落ちるの、そのときはロープを巻いて雲の上から飛び降りるんだけど私は運悪くロープを巻くのを忘れていたの……。」

ぶつかっかけ、ひも無しバンジーとこうやつですか?雲の高さからバンジーも怖そうですがひもなしだったら死ぬでしょう。・・・・

「拳銃の果てに狙つた獲物は一発で消滅をせる」とができなかつた

し、ロープもないから空に元に戻る」ともできなくなつたの……。」

前者はまあ、もうちょい大きくなれば達成できそうなものとして後者は自業自得だつた……。しかし、あてがないのはかわいそうだなあ。

「特に極めつけは変質者に教わるて力を全て使い終わるなんてまつたく、馬鹿げた話だわ。」

その変質者は俺ですか?別に何もする予定もありませんが?

「はいはい、じゃあ、俺の家にきてくださいよ。似たような人がいますからね。」

あのおばさんのことだから間違ひなく許可するだらうがこの少女がどう出るかはまったくわからない。

「……そうね、ありがたく私があなたの家に行つてあげましょう。輝さん、早く道案内をしてください。」

どことなくえらぶつている気がしてならないが相手は多分俺より年下だからここで反抗するのもなんだか子供みたいだ。俺はとりあえず立ち上がり少女に手を差し出した。

「ほひ、つかまりなよ。」

「……しょうがないわね。」

やれやれ、手をつかんだのはいいが一向に立ち上がらないところを見ると間違ひなく立てないんだろうなあ。俺は手を離すことにした。

「あ・・・・・」

当然のようすに立ち上がろうとしていた少女は支えがなくなり後ろにひかる。せせせ、いこぎまだ。

「なにすんのよーーー！」

「ほひ、これなら移動できるだろひへ。」

俺は少女に背中を見せる。いいかげん腹が減ってきたので早く帰りたい。拳句の果てに濡れているので風邪をひいてしまう可能性も高い。

「・・・ふんひーーー！」

そんな感じで俺の背中に軽い体重がかかる。俺は立ち上がって歩き始めた。ああ、神様・・・できればまともな女の子との出会いをください。

「まあ、蹴つたのは悪かつたよ。」

「・・・・・べ、別にいいわよ。」

ああ、俺って不運。背中にあたる感覚もしょぼい。せひよつと強くしていいのになあ。

「・・・・・私も悪かつたわよ。殺そつとして・・・・・

「?なんか言った?」

「ふんっ！何もいってないわよ。」

・・・・・これから先が思いやられるのは俺だけか？それともこれは俺が何か悪いことをしてしまった償いなのか？教えて、おじいさま。てか、今度あつたら絶対に何か聞き出してやる！！

電撃とこのかみの劇場（後書き）

先はまだまだ長い……ひとつも、既様……どうか
？面白かったら幸いです。それと感想や意見をお待ちしております
のでよろしくお願ひしますね。

「私と数えるべきか一人と数えるべきか……」

七、

「…………雨が降る中、家の前におばさんが立っていた。俺の旦
がおかしくなこのなひおひほせんはまつたくねれていな」。

「…………遅かつたじやないか? ビード油を売つてたんだ?」

「…………言えない、ひよつとじこわこと会つてたなんて口が滑つて
もいえねえよ。

「こえ、ひよつと雷が俺に直撃しただけです。」

そして俺は背負つてこむ少女を指してこうつた。

「葵の妹なんですが……」の子も面候をせひいですか?」

なんとも適当な設定で懇にがしうがないのだ。俺の平均的な頭
ではこのくらいが限度……それにこれ以上複雑にしてしまつたら
説明に苦労するに違ひない。

「…………そつかい、あんだが責任をもつてきみひと話をするんだ
よ。といひで前はなんと言つただい?」

俺はてつくり後ろの少女が答えると黙つたが、予想に反する「へ
がおきた。

「私の名前なんてないわよ。輝が決めなきよ。」

小声だがたぶんおばさんには聞こえているに違いない。しかし、葵の時といい、名前がないなんておかしいんじゃないのか？俺としてはなかなか考えるのが難しいのだが……

「……で、その子の名前はなんていうんだい？輝、早く言わないと私は家に入るよ。」

「ああっ、加奈です！！加奈って名前なんですよ。」

かみなりの一文字田と二文字田をとつて加奈……。ああ、慌てて考えたがなかなかいい名前に違いない……と思つ。

「そりゃ、じゃあ、さつさと風呂に入っちゃいな。そんな泥だらけでずぶ濡れの格好を女の子にさせるもんじやないよ。」

そういえば俺と加奈の体はすごい汚れようだ。特に俺の服は加奈の電撃で思いつきり黒くなっている……いや、そういえば俺の着ている服は黒色だったか。

「はい、じゃあ俺が先に入りますね。」

「おまえは馬鹿か？まずは汚れている女の子を先に入れるもんどうう！？」

「はい、それはわかりましたが……俺の顔にパンチをしないでください。」

「は、はい。わかりました。」

葵が風呂の準備をしててくれたのですぐに入れそうだったのだが、先に加奈が入ることになつたので俺は汚いまま家の周りでストレッヂをしている。

「わんわんわん！！」

「あー、つるさいわい！！」

庭にいる犬（名前はホワイティーという画からだの色は真っ黒だ。性別はメスらしい、俺にはほえまくりである。）が今日も俺に異議を申し立てている。

「わんわんわんわん、ホールインワン！！」

「犬はしゃべっちゃ駄目だろ！！」

暇なのはわかるが意味のわからないボケはやめてほしい。俺は今、かなり疲れているのだ。

「輝さん、次いいですよ。」

「わかつた。」

俺にはえまくつっている犬を無視して風呂場に向かった。まったく、俺より後にこの家にきたくせしてなぜ俺だけに冷たくあたるんだか？ああ、できれば猫がいいなあ。

「！？」

「うわあ、なんだ、加奈がまだ入っていたのか……。早く着替えうよ。」

「！」のスケベHー。わざと出でこけえーー！」

「……ふん、見られて恥ずかしい体になつてその台詞を言いやがれ！」

俺はさつさと扉を閉めてその場を離れた。もしかしたら電撃が俺を襲うかもしれないと思ったからである。そして、俺を襲つたのは電撃ではなく、おばさんの鉄拳であった。

「……いいかい、輝、絶対に女の子にそんなことを今度から言つちやだめだよ？もし今度そんなこといつたら私がお仕置きするからね？きちんと加奈に謝つておくんだよ。」

腹にめり込んだその一撃の効果は麻痺効果だつたようだ。俺はその場で悶絶してしまいおばさんは俺を踏んでどこかに去つていった。風呂場の扉が開き、中から加奈が姿をあらわした。

「白業自得よ、輝……」

「……加奈、すまんかった。」

「！」は素直に謝つたほうがいいだろう。この一撃は死にはしないだろうが予定されている寿命が早まつてぐく気がしてならない。見事に急所にあたつている。

「もういいのよ。それより大丈夫?」

ふ、なかなか優しい所があるじゃないか……。俺は壁を支えにしながら立ち上がり加奈に首を動かすだけで返事した。そして、扉を閉める。

「はあ、やれやれだあ。」

今日は厄日だ。ついてない。きっと今日の正座占いは間違いないくワーストワンはかに座に違いない。ああ、そういうえば葵もかに座だつたかな?あいつもなんか悪いことでもあつたのか?

「さて、体でも洗つかな?」

「輝さん、石鹼はいじですよ。」

「ねむ、ありがと葵。気が利くな……?」

あ、あれ?なんで……なんで葵がいるんだあ……!

「びつばびびびびびびびびび葵がいるんだあ……!」

「輝、ひぬわわよ。」

「あ、加奈すまん……?」

?あれ、おかしくないか?……なんで加奈までいるんだよ?.

「どうしたんですか、輝さん?顔が真っ赤ですよ?」

「ちょっと湯船に長くつかりすぎじゃないの？ちょっと体を冷やしちたほうがいいわよ？」

「…………あ、ああ。じゃ、わざにあがることあるわ。」

な、なぜこんな……穴があつたら入りたいような状況になつているんだ？

俺はとりあえずこの危機的状況から脱出するために脱衣所へと逃げ出したのであつた。まあ、あれだ・・・こういうのはいけないこどだと思つし・・・いや、いたほうがいいのかもしれない。

「よ、輝。楽しかったかい？」

脱衣所にはおばさん二二ヤ二二ヤしながら立っていたのであつた。犯人はあんたかあ！！

一匹と数えるべきか一人と数えるべきか・・・・（後書き）

さあ、まだまだ土俵にも上がつていませんが・・・まだまがんばっていきたいと思います！！読んでくれる人がいる限りがん張りたいと思います。

スタートラインにはまだ足りない！！

八、

「まさか一人が入ってきたのに気が付いていなかつたのかい？」

ぐ、普通にあの二人は入つてきていたのか？考え方をしていたのでまつたく気が付かなかつた。これは俺が悪いのか？

「・・・・おばさんが仕掛けたんですか？」

「そんなことするわけないじゃないか。あの二人が自ら言つてきたんだよ。」

え、そんなことつてあるのか？クラスの中で唯一彼女のいない俺のために神様が与えてくれたイベントか？

「ほら、鼻の下を伸ばしてないでさつと朝飯を食べててくれないか？」

「あ、は、はい。」

俺はさつと着替えて一人で先に朝食を食べに行つた。ちなみに今日の朝食は卵かけご飯であつた。

朝食も食べ終わつた後、おばさんのところに向かつた。おばさんの家に伝わるらしい、なんだかわからない格闘技を教えてもらつたのである。

「さて、おまえはまだ基本にもたどりつけていないので、今日、それに入りたいと思う。」

「はい、わかりました。」

おばさんは確かに強いが、稽古では俺に何にもしてこない。おばさんが言うには実際にその場でその習ったものを試せということだ。まあ、今のところは町の不良に絡まれたことぐらいしかないからいいのだが、もしかしたら加奈みたいなことがあるかもしれないのこれからは真剣にやっていきたいと思ったのだ。

午前中はその稽古をずっとやり、午後からはおつかいである。

「輝さん、どこに行くんですか？」

「ちょうどこいわ。輝、この町を教えてよ。」

葵と加奈もいつしょについてきた。ああ、なんだか嬉しいきぶんだあ。

「まずはおつかいを頼まれているから先にそつちを終わらせて、その後に加奈たちにこの町を教えてやるよ。」

おばさんから頼まれたものは次のものである。シャンプー、リンス、卵、トマト・・・あと、看板。看板以外は何とかなりそうだが、看板なんてスーパーに売っているのか？俺は一度も見たことがないが・・・。ああ、なるほど・・・これはどこかの道場に行けばあるかもしれないな。売っているかは謎だが。

「このとき俺はそんな簡単に考えていたが、甘かった。多分、糖分に換算した場合は間違いなく糖尿病になっていたに違いない。

スーパーで頼まれたものほとんどを買つことに成功した。「このミッショーンは簡単であった。そして、俺は今、一人に町のいろいろなところを教えている。

「……で、ここが俺がよく行く店かな？」

「へえ、輝さんって本屋によく行くんですね？」

「どうせ、ハツチな本を立ち読み、もしくは年齢偽つて買つているんでしょ？」

「ぐ、うるせえな……今日はあの爺さんと一緒にお供え物をしようと考えていたが、この一人がいたら不可能だ。今日は諦めよう。

「この町は裏通りなんかはちょっと危険だから一人とも気をつけてくれよ。危ないお兄さんやおじさんについていつたらだめだからな？特に、物で釣つてきそうつな奴と甘い言葉で誘惑してくるなんて奴は言語道断だ。」

「ちょっと、保護者っぽいことを言つてしまつたが別にこの二人なら大丈夫だろう。あれ、何でそこで俺を見るの？」

「私は物でつられて今、ここに来ますよ？」

「私は甘い言葉で今ここにいるわよ？」

あ……。

「……俺は危なくない人間だ。」

「どうでしょかね？」

「そうよね、あやしいもんよ。」

ぐ、返す言葉がみつかねえな。いや、俺は安全な人間だ！！
とりあえず本屋から離れてとある方角に歩き出す。安心してほしいが別に路地裏に行くわけではない。俺が一度も来たことがないところである。おばさんから昔聞いた話だが、そこら辺にはいろいろな道場があるらしい。もしかしたら看板が売っているかもしれない。

そして、俺は目に入った道場に適当に入つた。多分、ここまでは良かつたに違いない。この後の行動が間違いだつたのだ。

「すいませーん、看板ください！――」

謎の拳法や木刀を振り回していた人物たちの視線が俺に突き刺さる。間違いなくこの視線は俺を敵と分析したに違いない。なぜだ？

「……輝さん、なぜこんなとこりで道場破りなんてするんですか？」

「道場……破り？」

「ほら、looのボスみたいなやつが輝のところにきたわよ。がんばつてね？」

加奈が指差す方向には熊のよつた男がこっちに歩いてきていた。

その目には間違いない獲物を狩るときの熊の目をしている。

「ほう、貴様みたいな貧弱な野郎が俺たちを倒しにきたのか？・・・
試してやろッ！・・・」

思いつきり振りかぶった拳を俺の平均的だと思つてゐる顔に・・・
いや、やはりあんなぱんちを食らつたら間違いなく今より酷い顔に
なるに違ひない。だが、おばさんのもよりスピードは間違いなく
遅いので対処可能だ。軽く右に重心を傾けて・・・相手の手を引
きカウンター！・・・

「てりやあ

「ぐ・・・・

掛け声がしょぼいのは仕方がない。俺はかつこいい掛け声なんて
思いつけないので。誰かが教えてくれるのならぜひともそれを使わ
せてもらいたい。まあ、とりあえずは相手の・・・なかなかごつい
顔に渾身とはいかないが結構威力のあるだろう一撃を食らわせるこ
とに成功した。相手は床に倒れ動かなくなつた。

「せ、先生！・・・」

「大変だ！熊先生がやられたぞ！・・・みんな、今のうちに逃げるんだ。
」

うわつ、先生を見捨てて逃げていつたよ。道場の反対側の扉を開
けて少數ながらいたここの中下生であろう人物たちは我先にと逃げ
出してしまつた。熊先生と呼ばれた人物はやつてきた襲撃者の気を
引く材料とされてしまつたようだ。・・・・襲撃者であつた俺とし

てはこれは人道に反すると思うがね・・・。

「・・・ふふ、完敗だ。貴様に看板をくれてやるが・・・だが、最後に名前を教えてほしい。」

「えーっと、白川 輝だ。」

「そうか。」

未練がなくなったのか熊先生という人物は再び氣絶してしまったようだ。これで間違いなく俺の夢に出てくることはないだろう。化けて出てくるのは俺の爺さんだけで十分だ。

「さ、そろそろ帰りましょうか?」

「輝、いつまで突っ立つてるのよ。看板はもうったんでしょう?」

俺は氣絶している人物に向かつて手を合わせてその場を去った。

スタートラインにはまだ足りない！！（後書き）

ここでこれからのお進路予定ですが・・・そろそろ学校に行くべきではないかと思いました。学校で一暴れ。いや、窓を破つたりするわけではありませんので安心してください。

シリアルス展開を望む御爺様

九、

看板を俺が背負い、葵と加奈がそれぞれ小さなスーパーの袋を持つている。手伝ってくれるのはうれしいが俺としてはこの重たい看板をどうにかしてほしい。

「意外と強いのね？ 見た目はちょっと細いけど・・・」

「別に強いわけじゃねえよ。たまたま偶然のラッキーだったのさ。」

勝負事なんか運で決まるとは思っている。その場の状況、天気、今日の運勢で人生なんて変わってしまうものだ。

「だけど、怪我しなくてよかったですよ。」

ああ、心配してくれてありがとうよ、葵。おばさんこそなこといわれたことなんて一度もないからなあ。こつも怪我した時はおじさんがしてくれるし・・・。

「葵、ありがとな。」

「いえいえ、同じ屋根の下に住むもの同士、心配するのも当然のことですよ。」

「わ、私だって心配したのよ？」

「ああ、加奈もありがとな・・・」

加奈は確かに俺にがんばれといつてくれたからな。

「…………といひでやあ、一人とも看板なんて何に使うと申す?」

俺がふとした疑問を一人に聞いてみると葵と加奈は考え込んだ。凄い考え方である。たとえるなら、解く事がなかなか難しい数学の文章問題を先に解いて先生に書めてもらおうといった感じである。いや、真剣に考えてくれるのはうれしいのだが、そこまでする必要はないと思つただが……

「…………まな板ですかね?」

「…………いや、表札を作るのよ……!」

前者なら、別に看板を買つて「こ」とは言わないだろう。そして後者なら、こんなでかいもんはいらんだろう?

一人は俺の顔を見ている。何かを期待しているのはわかっているのだが……このどちらかを正解にするのはちよつとおかしいだろうな。

「…………いや、俺は……コレクションだと思つ。」

一人は俺の顔をじつと見ている。俺としては思いつきりボケてみたのだが、もしかして滑ったか?

「ああ、なるほど……流石輝さんですね。考へる」ともできませんでしたよ。」

「輝にしてはやるじやない……今度なんか問題があつても絶対先

に解いてやるからね……」

「」の一人は天然かもしれないな。まあ、答えは家に着いておばさんに聞けばわかるんだがな。そろそろ家につく頃だし。いや、また家の前におばさんが立っていた。

「おかえり、思つたより遅かつたじゃないか？」

「いや、実はシャンプーとリンスの違いをこの二人に聞かれたんですよ。」

あの時はかなり苦戦したぜ。ふ、熊先生という人物より強敵だった。

「まあ、看板はあつさりゲットすることができたのでよかったですけどね。」

「そうか、では明日から週に一回は看板を持つてきてくれよ。あれは私のコレクションにするかな。」

うわ、俺の感があたってしまった。どうしたもんかね……。

「ああ、それといい忘れたが看板をもらいに行くときは必ず誰かと二人で行くことだ。この約束を破つた場合はさて、どうしてやろうかね？」

おばさんの怖いところはあえて何もいわないところだ。他の人はどうか知らないが俺はそんなことをされるとかなり心が不安定となる。

「・・・それとな、今から山に行つてもうこいたいんだが・・・？」

おばさんが「」まで俺にお使いを頼むのはちょっと危険視したほうがいい兆候だ。看板どこのかど」かの首領の首でもとつてこといわれているようなものもある。

「場所はどこですか？」

まあ、俺としてはいろいろとお世話になつてこるのは間違いないのだから俺のできる範囲ではできるだけしているのだ。うんうん、どうせ今回もうくなことがないんだろうな。

「・・・ほり、この町の近くにあるあの山だ。言つておくが輝一人だけで行つてもうらう。で、とあるものをとつてきてもらいたい。」

俺の住んでいる町のかなり近くに山がある。しかも俺の家から結構近くといつても距離があるので・・・まあ、いけない距離ではない。そして、おばさんが俺に頼んだものは山の頂上にあるらしい小屋に忘れてきた水筒だそうだ。

「じゃ、行つてくるよ。葵、加奈。」

「はい、こいつらしあい。」

「変な人物についていったらダメよ?」

その返事に苦笑しながら俺は自転車にまたがり家を後にした。まだ、夕日ではないくらいなのでもしかしたら早くに帰れるかも知れなかった。

す」しかかつて、獸道から山に登る」こととする。おばさんが言つにはこの道が一番の近道なのだそうだ。だが、山をなめてはいけない。今はまだ結構明るいがもし、暗くなつてしまつたら迷子になつてしまふ可能性もある。

そして、あつさつと俺は迷子になつた。しかもまだ明るい。

「・・・・わて、どつちからきたかな？」

何の鳥だかわからない泣き声を聞いたりしているがゆつたりとしている場合ではない。すでに遭難しているのだ。こうなつたら耳を研ぎ澄まして川があるところを見つけて下つていこう。そうすればいずれ町にたどり着くに違ひない。いや、そうであつてほしいものだ。

川の流れがある方向に歩いていくと・・・不幸なことに頭上の木が折れたようで、かわすことのできなかつた俺はそれをもろに食らつて意識を遠いかなたに飛ばしてしまつた。

「はあ、あつさつ輝は死んでしまつのか。これで一回三じみよ。」

「・・・・人間つて意外にもろいんだな、爺さん。」

「まあ、そんなんじや。どうじや、また生き返らせようか？それともわしと一緒にきてハーレムを満喫でもするか？最初に言っておくが天国はわしの領土じやからおまえには地獄に行つてもらうがな。

「

「せひとも生き返りせてもらいたい。まだなんにもしてないんだ
……それはそうと爺さん、聞きたいことがある。」

「なんじゃ？ 天国のおねえさんの平均的なスリーサイズか？ 悪いが
まだ、わしも把握していない部分があるから残念じゃがすべてを教え
てやることなんてできないぞ？」

「いや、やうじやなくてだ。いつたい童が何で女子になるんだ？
それが疑問でならん……」

「・・・いいか、輝。言葉は知つていて初めて意味のなすものとな
る。知らなければ意味がないからなあ。おまえは知ろうとしない、
もしくは知つているのに気が付いていないだけじゃ。それに、そう
いつことは生きている誰かに聞くことじゃ。さて、なぞなぞはこれ
で終わり。やうじや。・・・礼を言つぞ輝。今回はシリアルスな
おじいさんを演じることができた。」

「よく言ひせり、まったくいつもとかわらないくせして・・・」

そして、俺はこれ以上何も教えてくれないだらうと思われる爺さ
んと別れたのであった。

シリーズ展開を望む御爺様（後書き）

「……予告しておきますが……まだまだ龍は出ぬと申します。いや、一桁になる可能性は余りありませんが……少なくとも後、「出」は出ると思います。

白衣が似合つね姉さん！

十、

気が付いたらいつかと似た状況に陥っていた。目の前に大蛇がいるのだ。いや、現実逃避はやめておこう……。その竜は俺を見ている。もし、もしもだ……この竜がお腹を減らしてた場合は餌となるのは間違いないと俺となるに違いない。ここにはパンもないのだ。

じーっ。

ああ、この山には竜もいたのかあ。すっげえ、危険だつたんだなあ。何で誰も気がつかなかつたんだ？あ、なるほどお、考えられることは一つ。会ってきた人間をその場で刺身かなんかにして食べてしまつたに違ひない。だから誰も竜がいることに気が付いていないのかあ。

「…………」の世に未練はない！！だが、最後に葵と加奈が気づいていない俺の大切な本をどうにかしたい！

あれは一人にはちょっと刺激が強すぎる本だと俺は思う……いや、事実俺にも刺激が強すぎるのだが……いや、まあ、竜を見れたのはとてもうれしい。竜は新緑の体をもてあましているのか尻尾を振り振りしている。その目はつぶらで……動物の好きな俺にはたまらなく可愛いと思つてしまつた。ああ、見ていて癒されるなあ。鱗も結構かつこいいというか……ぜひとも触つてみたい。

「触つていいか？」

竜はその穏やかだつた眼を鋭く細め俺を見た。これは間違いなく否定の行動に違いない。

「いや、傷つけるつもりはないんだ。結構手入れの行き届いたうろこがどんな感触をしているか不思議に思つただけだから……」

竜に喧嘩を売つたらどうなるかは加奈のときによおくわかつた。でか、さつきまで死んでたらしいし……そういうえば、上に乗つていた木がなくなっていることに気が付いた。

「……もしかして、お前がどかしてくれたのか？」

竜はその長い体を俺に近づけてきた。だが、いつでも俺を単なる肉にできる用意はしているようだ。竜はそうだといふような目を見て俺を見ている。

「そうか、ありがとな。」

もうそろそろ、夕焼けが沈もうとしている。とりあえず今日は帰つたほうがよさそうだ。竜が道を知つてゐるかはなぞだが……俺は尋ねることにした。

「人里に降りる道を知つてゐるか？」

竜は口を開けて俺を捕まえた。いや、これつてもしかして食われるか?なんか俺悪いこといつたのか?

どうやら何かを俺に求めているようだ……なんとなくだが分かる。そして、竜はくわえていた俺を近くにあつた木に思いつきぶつけたのであった。あたつたところは頭で俺の意識は先程戻つたばかりなのに再びどこかかなたに飛び去つてしまつたのである。

ああ、俺って何回「そんな」と陥りてこるのだらうか？

「お前さん、そんなに死にたいのか？」

「いや、今日は間違いなく殺されただろう。別に俺は無駄死にがしたいわけじゃないよじこさん。」

「まあ、とうあえずはどうしたんじゃ？ 今度は地獄のトラパンのお姉さんのスリーサイズでも聞きに来たのか？ こっちは大体わかるぞ？」

「……威張られても困るがな……なあ、」前教えてくれたあの呪文はいったいなんだ？

「……わあ？ わしあぜんぜん分からんぞ？」

「……ぐ、まあいいや。『我が奴において~~命~~ある、眞の姿を見せよ。』……これでよしと。」

「輝も大変じやのう。ハーレムでも作る気か？」

「……そんな気はない。あばよ姫さん。」

辺りはすでに暗くて完璧に遭難だ。どうやらひつぱつひつぱつられた木に背中を預けているようだ。

「……」

頭が痛い。手で触つてみると・・・。イチゴジャムがついてしまいました・・・。いや、俺の血だけね。

「すいません、ちょっと強く木にあてすぎました。てへっー。」

そういうて俺の前に姿を見せたのは白衣を着て眼鏡をかけている清楚な女性だった。いやあ、傷の痛みを一瞬だけ忘れてしまったね。

「あなたは・・・？」

「輝君を木にぶつけた犯人です。」

暗がりながらも彼女の顔が見えるのはまだかすかに太陽が沈んでいないからかもしれない。ああ、今日の晩御飯はなんにもないなあ。じん變成るなら何か持つてくれればよかつた。いや、そんなことよりこの女性に聞きたいことがある。

「あの、名前は何ですか？」

「名前ですか？輝君がつけてくれるんだじょ？」

やつぱりだ。竜から人間みたいになつたら名前がないんだ。いや、たぶんもとから名前なんてないのかもしないなあ。さて、なんて名前を付けようか？腹が減つてしまつたく頭がまわらねえ。

「・・・醜いんですけどですか？」

「ああ、いいですねえ。輝君、これからよろしくお願ひしますね。」

・・・・ははは、これで三匹目？か。ついているのかいないのか・・・
・・・・どうだらうねえ。誰か教えてほしいよ。

「碧さん、どこか寝るといろありますか？できれば屋根つきの小屋とか見たことがありますか？」

「ああ、それならいい物件を知っていますよ。ついてきてください。」

頭からの出血は止まつたようだ。よかつたあ。まあ、今はこの人に付いていくことにしよう。いや、危ない大人についていくのは危険だが・・・・・

「ああ、いいですよ。」

碧さんが案内してくれた場所は洞穴みたいな場所であつた。文句を言つている場合ではないので今日はここで夜を明かさなければならぬ。今日はもう、やる事がないので寝ることにしよう。羊でも数えていれば早く夢の世界にいけるはずだ。

「輝君、もう寝るの？」

「ええ、今日はいろいろあつて疲れましたからね。」

「じゃ、私もねよつと。」

碧さんは俺の隣に寝転がつた。床はちよつと乾いている石であつたのでぬれていらない。いや、まあ、一緒に寝てくれるるのは正直ありがたい。こんな暗闇の中で一人で寝たくないのだ！別にやましい気持ちはこれっぽっちもないぞこの野郎！！

「いやあ、久々に会つた人間が輝君みたいな人でよかつたよかつた。
それに食べちゃいたいぐら可愛いからねえ。」

俺はその台詞を聞いて背筋が寒くなつた。やつぱり一人で寝たほう
がいいのかもしれない。

白衣が似合つね姉ちゃん（後書き）

さて、とうとう三人目。の登場です。基本的にはあと一人？（いや、一匹か？）出したいと思っています。まだまだがんばっていきたいと思います。

嬉しさと恐怖の入り混じった朝

十一、

俺の顔に何かがあたっている。それはなんだかやわらかくて暖かい。ああ、いつまでもこのままでいたい・・・・つて、いつてててて！

「・・・・・。」

目を開けるとそれは碧さんの胸であった。いやあ、機能は気がつかなかつたが意外にでかいねえ。俺の体を抱きしめるようにして眠つている。いや、実際頭が痛いのは碧さんが俺の頭に噛み付いているからだ。

がじがじ・・・

なおも俺の頭に噛み付いている碧さん。顔が碧さんの胸にあるので声を出すことができない。このままでは本当に食われてしまうかもしねれない。

「・・・ん？まあう。」

そういうて碧さんは俺の頭をかじるのをやめた。確かに俺の頭をかじつてもおいしくないだろう。俺としては今、おいしい体験をしているんだけどね。

「んんっ・・・・朝か。輝君、起きて下せー。朝ですよ。」

むづりゅうといひへじていた。

「…………おきなこと頭噛み千切るかも…………」

「はい、輝さん、ねはよついざれこます。」

そつぎまで実際にしていたので彼女の言つてこることがうそに聞こえなかつた。今、起きなかつたら間違いなく彼女の朝食になつた可能性もあつたかもしけない。

「それじゃあ、輝君の家に行きましょつか？道路までの道なら私が案内します。」

「ええ、お願ひしますね。」

「はい、お願ひされます。」

彼女は近くに置いていた眼鏡を装着して俺の前に立つて歩き出した。いやあ、その腰まである長い髪の後姿はなんだか見ていじるどばちがあたりそうだなあ。

「…………あいたあ…………」

俺は案の定、近くにあつた石につまづいて転んでしまつた。いかんいかん、何を考えているんだ！――

「大丈夫ですか？」こりは石が多いので氣をつけてくださいね？」

「…………はい、今後は氣をつける」とこします。」

俺は今度は下を見て歩くことにした。失敗したらその教訓をもとに今後の行動に気をつけなければならない。綺麗なお姉さんの後姿をぼけっとみている場合ではないのだ。仮にも遭難している状況だし……

「輝君、後ろにくつついで歩かないでくれるかなあ。歩きづらいんだけど……」

「あ、すいません……」

俺としたことが集中しすぎてかなりの速さで碧さんの背中にくつつきながら歩いていたようだ。なぜ気が付かなかつたんだ？普通は気が付くだろうに……でも、やつぱりやわらかかったなあ。家にいる一人にはほとんど触れた事がないからわからないし……。

「つて、何を考えているんだあ！――」

「へ?どうかしましたか。」

「い、いえなにも……」

あ、あぶなかつたあ。心の雄叫びがついつい口から出てしまつた。やれやれ……

「さ、ここからが道路ですよ。」

碧さんの指差すところには昨日、俺が置いてきた自転車が主人の帰宅を待つてくれた。よかつた、変な大人に連れ去られなくて……。

「自転車があるのなら、一人乗りができますね。ちゅうひ荷台もありますよ。」

そういうと、俺より先に荷台に飛び乗り、俺が乗るのを待つている。できれば一人乗りなんて危ない真似はしたくないのだがしちゃがない。

「さ、しつかりつかまつてくださいよ？」

「はい、輝君。」

ああ、背中にあたる感触が気持ちいいなあ。・・・さて、そろそろ行きますかね？俺はペダルを思いつつきながらして山道を降り始めた。

そして、家が見えてきたのだが・・・・ちょっと困ったことになつているらしい。いや、なぜそう言われるかというと・・・家の前でおばさんと葵、そして、加奈が腕組みで待っているのだ。怒っているのは間違いないだろう。ここには反省しているような顔をするしかない。

「・・・心配かけてすみません。」

彼女たちの目に俺の姿が捉えられた瞬間、俺は自転車から降りて頭を下げた。

「・・・ほお、朝帰りで女を連れて帰つてするのがおまえの反省した姿かい？」

おばさんと言つとおりである。さればかりは説明のしよつがない。こまつたものだ。

「さて、輝の話を聞かせてもらおうか？その女のことはひいても私たちが納得するまでじつくりとね……」

俺はおばさんと葵、そして加奈に連行されたのであった。

約、90パーセントの事を（朝の事は言つていない。）喋り終わり俺は三人の顔を眺めている。おばさんには一応、彼女が竜であることを話しておいた。ついでに他の一人が竜であることも素直に打ち明けた。

「……なるほど、輝は机の裏にある本以外にも私に隠し事をしていたのか？」

「いや、何で知っているんですか？」

「まあ、葵と加奈が人間ではないのは知つていたし……お前さんの横にいる姉ちゃんも人間ではないのはわかつた。で、お前はどうしたいんだい？」

俺はこのときこよづやく、おばさんがもしかしたら爺さんから何か教えられているのかもしないと想つた。これぞ、探偵への第一歩……かな？

「爺さんから何か聞いてませんか？俺の事や竜のことを……」

「ああ、おまえの爺さんからはいろいろと頼まれている。だが、それをお前に教えることはできない。」

「…………なぜですか！－」

「こいつ、俺は聞き返してしまった。だつて氣になるだろ？。

「理由ならある、お前がまだまだ子供だからさ。でも、今回せいいじで終わりだ。また今度な。」

「…………はい、ヒーリング課さんせいじにこじいんですか？」

「ああ、好きにしな。」

おばさんは別に碧さんがこの家についてもいいらしく。その事には別に文句を言わなかつた。しかし・・・・さすがに俺の部屋に四人はきつこかもしれないなあ。びつじたもんだらうか？

「ああ、輝はあとで新しい部屋に案内してやるよ。」

あとでおばさんに案内された部屋は一階の物置部屋であった。

嬉しさと恐怖の入り混じった朝（後書き）

さて、ちょっと話が進んだと思つてこる今日、この頃です。まあ、実際のところはあんまり進展してませんがね。ま、これからもがんばっていきたいと思つていますので、できましたら応援よろしくお願ひします。

勢力、拡大中！

十一、

「……ふあああ。」

田を覚ましてあたりを見渡す。まだ少し暗い。だが、そろそろ起きる時間だ。学校に行く前に走つてこないといけない。俺は布団から抜け出して制服を探す。

「ああ、そこにあったのか……」

埃がぶつたダンボールの上においてある俺の制服を摘み上げ、おまけとしてついてきた埃をはらう。俺の部屋はまだ掃除が終わっていないので埃だらけだ。「のまま」「ついでいたら間違いなく埃アレルギーになってしまつ。

着替えて一階に向かうとすでにおじさんは仕事に行つているらしく、姿が見えない。起きているのはおばさんと俺だけだ。

「……輝、おはよう。」

「……はい、おはようございます。」

俺の今日の朝食はパンとサラダとetcである。それをさつあと食べ終わり、学校に向かう。

「いってきます。」

「ああ、そう言えば今日は転校生がくるかもしないと右隣のおば

さんが言つてたぞ？「

おばさんが言つた事を深く考えずに走り出す。おばさんは[冗談を言つのが大好きだ。

チャイムがもう少しで鳴ると、ひるで学校についてみると、この前同じクラスとなつた奴が俺の近くによつてきた。（中学の頃から俺はいろいろと他校に行つたことがあるので、クラスの男子のほとんどと知り合つた。）どいつもこいつも休日は彼女とのデートの約束があるとかで俺の遊びの約束を足蹴にしやがつた薄情な野郎どもだ。

「・・・白川、今月中に転校生が来るらしいぜ？まあ、そんなことより聞いてくれよ、昨日のデートは結構いい雰囲気だつたぜ。」

「・・・ふん、ひむせえよ。俺には関係ないことだ。」

「こいつは中学の頃から友達だったやつで常に何かを俺に自慢してくれる嫌な奴だ。こいつの名前など教えておかなくていいと思つのであえて名前は伏せておく。

「しかしまあ、お前は鈍いやつだなあ。この前の昼休みだつていつもいふと見られてただらう？』

「上級生のこわーい、お兄さんがたにか？」

「いや、違つて・・・。クラスの女子からだよ。」

「・・・俺はまだ何か犯罪的な行為は行つていないはずだぞ？なぜそんな睨まれるような事にならないといけないんだ？」「

「だから鈍いつていわれるんだよ。」

「、勝手に何とでも言いやがれ！…どうせ俺にお似合いなのは恐い顔した連中さ。だが、腹いせとしてそんな連中に手を出すと後でおばさんに何をされるかわからない。」

キーンコーンカーンコーン

「はーい、皆さん」きげんようーー！」

チャイムと同時に飛び込んできた人物は白衣を着ていた。一瞬、俺の目がおかしくなったかと思った。

「君たちの元担任は行方不明となつたので私が代わりに先生となりましたあ。名前は緑山 碧えーす。理科の担当をさせてもらひりますのでよろしくお願ひしますね？」

クラス一同、ぽかーんとしている。ちなみに言うなら俺がその中でも特に驚いていた。だが、驚きはこのままでは終わらない。

「さて、今日から皆さんの中間になる人物が一人います。さ、二人とも入ってきてくださいーー！」

一人目はポニー・テールをしている女の子で二一人目はツインテールをした女の子であった。この時期に一人の転校生・・・ありえる確率はいかほどのものだろうか？俺はそんなこと考えずにただただぼさつと教壇を見つめていた。

「青柳 葵です。みなさん、よろしくお願ひしますね？」

「新原 加奈よ。ようしへ。」

「さあーて、一人の席は・・・まあ、空いている席にひやひやひと座つてね？」

空いている席などないと思われたが・・・・・いつのまにか俺の席の近くに設置されていた。うわあ・・・これはどうこつた状況だ？

「碧さん、これは何かの冗談ですか？」

「輝君、先生に向かつて何を言つているのかな？ちやんと碧先生と呼んでくださいね。」

「・・・・・碧先生、これは何かの冗談ですか？」

俺の質問に何人かの生徒が頷く。

「いえ、そんなことはありませんよ。さて、ちょっと輝君には後で話があるので職員室に来て下さいね。あ、後は転校してきた一人もついでに来て下さい。これで朝のホームルームを終わります。」

そういうて白衣の似合つ先生は教室を出て行つた。俺はしうがなく、一人と共に教室を出て振り返り一人に聞いた。

「・・・・・なにがあつたんだ？」

「さあ、それが椎名さんが昨日、学校に私たちを連れて行つたんですよ。」

椎名とはおばさんの本名だ。いや、多分これも偽名と思われる。去年までは美香と名乗っていた人なのだ。

「椎名さんは」の学校の理事長と知り合いらしく……とつあえず輝の動向を気にじりじりとこつたのよ。」

・・・・・俺の生活は監視されてるのか？

「まあ、今は碧さんのところに向かいましょ」

「・・・・・ああ・・・」

俺はため息を出したい衝動に駆られながらも廊下を職員室に向かって歩き出した。まあ、別にいいだろうな。

碧さんはおばさんからのかまりを言われるだけとなつた。といつても、遅刻をするなど授業中に寝るなの一つだけだったが・・・。

「白川、あの二人と知り合いなのか？」

「ああ、ちょっとな・・・・・。」

俺は今、くたびれて机に突っ伏している。今日の朝に走った距離が長かったのかもしれないがそれだけではないと思われる。そして、今日の朝おばさんが言つたことを思い出した・・・。

「なるほど・・・だからあんなことをこつてたのか？」

そこまで思い出してはつとなつた。俺の家の右隣は空家だったはずである。なぜそんなことをいつたんだ？

「しかし、おどろいたなあ・・・転校生が一人も来るなんてなあ。しかも今日だし・・・」

「そうだなあ・・・俺は明日だと聞いたんだが・・・」

さりに俺の周りに男子が集まつてきていろいろと話し始めるのであつた。そして、俺はなんだか奥歯に魚の骨がつまつたような顔をして考え込むのであつた。俺の考えていたことが現実になつてしまつたときはちょっとびっくりした。

襲撃者の少女

十三、

三人が住所、年齢、過去を偽装してしまった一田田は意外とあつさり過ぎていった。それに関しても何も言う事はない。ただ、三人が学校に行く一田田となる朝の出来事が正直びびつた。その日の朝、やはりおばさんに朝の挨拶を継げて家を出ると今日は覆面をつけた襲撃者がいた。

「覚悟……」

襲撃者は手に持っていた木刀で俺の頭に一閃を喰らわせようとする。だが、剣のきれいな切っ先は虚空をかすめ、地面にあたる。意外と……よけるのは簡単だ。いや、縦一閃ではなくて横一閃だつたらちょっと俺としては避けづらい。

さて、こういう場合は相手に時間を与えてはいけない。体任せの体当たりは芸がないが健全な生徒を木刀で襲う襲撃者にはつってつけだと俺は思う。といつても、倒してしまえば馬乗りになっているほうに分がある。こうやって組み敷いてから顔を覆っている布を取らせてもらおうか？

「……やつぱりアキは強いねえ。」

布を取った相手は女の子であった。ああ、よくあるよくある。いや、これは俺の過去ではよくあったことだ。

「……穂乃香ちゃん……か？」

「あたりだよ。」

俺は押し倒して馬乗りになつてゐる相手を見る。

彼女と最後に会つたのは小学三年生くらいだったかな? その頃爺さんが死んでしまい……俺は今の家にいるのだ。ちなみにいうなら両親が死んだのは小学一年の冬だったらしい。まあ、今となつては知らないがこれは爺さんが言つていたことなので嘘かもしれないさて、余談はこのぐらうとして俺は気になることがある。

「なぜここに?」

「うん、引っ越してきたんだよ。だけどあのアキがこんなに強くなつただなんてうれしいなあ。」

穂乃香ちゃんは遠い田をして話し始める。

「……朝行くときは私が木刀を持ってアキをコテインパンにしながら学校に行つてたのにねえ……。」

「それは小学一年生までだりつ……。」

「うんうん、なつかしいなあ。穂乃香ちゃんはなぜだか知らないが小学三年になると俺を叩くのをぴたりと止めた。それはそれで嬉しい事だったのだが……爺さんから余計にじこかれ始めた。その昔……いや、いまもだが俺はなんだか怪しい拳法みたいなものを習つてゐるのだ。

「それよつとあ、そろそろじこてくれないかなあ?」

道行く人たちは俺たちを見ている。そりやそつだ……朝っぱら

から女の子を押し倒している光景だからなあ。

「・・・・わかつたよ・・・」

手を貸して立ち上がらせると同時に何かが起きた。誰かの考えていることが俺の頭に入ってきたような感覚に襲われたのだ。

押し倒されるならそんな関係になつてからがいいなあ。

いや、ちょっと朝っぱらから誰が「こんな危ない」とを考えているんだ？ 誰だ？ そしてこんなことが前にもあつた気がするのは俺だけか？

「・・・アキは・・・ちょっと失礼だね・・・」

穂乃香ちゃんは俺を睨むような目で見てる。その目には少々、恥ずかしそうな顔が入り混じっている。

「私のこと胸が小さいつて思つていのでしょ。さつまちに来つてしまつたよ。」

「え・・・えええ！」

いや、確かに小さいと思ったけど・・・口に出してないし・・・もしかして・・・わざあんなテンジャラスな事を考えていたのは・・・目の前にいる小さい胸の女の子なのか?

いまだに手を持たれていたので俺はさつと手を放した。そりや

「あ、また思つたでしょ？」

そうだ・・・これ以上変なことが相手に伝わったりしたら間違いなく田の前の少女は俺に襲い掛かってくる。

「や、早く学校行」^{うつよへ}

「ああ・・・わかつたよ。」

先に走り出した幼馴染を追っかけていこうとして気がついた。なぜだかほとんど思い出すことができないのだ。彼女との思い出は木刀で叩かれていた事ぐらいしか頭に浮かんでこない。

「・・・アキ、あぶないっ！…」

ふつふー

道の真ん中で突っ立っていたのが間違いだったようだ。俺は右から迫る車にはねられてしまった。

車のスピードはあまり速くはなかつたが俺の体は中を舞い、近くのガードレールに頭からぶつかってしまった。いやいや、ほんとについてないねえ。

道を渡るときますばやく、注意してわたろうね？

「・・・今度は交通事故か？いい」^{身分じやのうへ}

「うるせえ。ちょっと思い出してただけだ！それになんだか知らないが俺は穂乃香ちゃんとの思い出を思い出すことができないんだよ。」

「

爺さんはおもく頷き、何かをしゃべり始めようとしたのであった。
(今日はなぜだか今までのように白い着物を着ておらず、アロハシャツであった。)

「・・・じつはなあ、わしがすばらしき世界に旅立つたあと、わしは思い出したのじや。」

「なにを?」

「わしがよく見ていたビデオの隣にな・・・面白いものがあるのじやが・・・」

「どうせスケベビデオだろ?」

「いや、それはわしにしては珍しい、ものであった。おまえの小さい頃のビデオじや。ある人物がお前の24時間撮影しており、何があつたのかもわかるところ、すぐれものじや。」

「・・・俺つて監視されてたのかよ?」

「まあ、爺のお節介じやよ。そんなことより、今、ここに天使のお姉さんに準備してもらつたビデオがある・・・。」

「よし、早速見よつー!」

「わかつたわかつた。それ・・・

「まちーー!」

「・・・・・爺さん、ちょっとこれは違つんじやないか?」

「すまん、これさわしのを気に入りの一品じゅつた。ねむ、じゅち
じゅつた。」

「・・・全く、何文章でも表現できぬ危ないビーテオを俺に見せて
んだよ。」

「まあ、これもわしなりのユーモアじゃ。きっと輝も大人になった
らわしのようなかつこよくてもてもてのいい男になるぞ?」

「・・・いや、いまだに女子と話したことほほとんびなこからわ
かんねえな?」

爺さんは黙つてそのままビーテオをセツトし、スイッチを押した。
今度は間違いないようだ。

輝の過去は前編だけ？

十四、

(御爺さんからのお願い テレビを見るときは離れてみるのじゃよ
?)

僕の名前は白川 輝。家には爺さんと一緒に住んでいる。僕の両親は爺さんが言つには死んでしまったやうだ。それ以降、爺さんはおじいちゃんと言つのを嫌がり、じいさんといつてくれと頼んできた。だから僕は爺さんと呼んでいる。

「こつてきまあす。」

僕の家の隣は誰も住んでいないくて、幼馴染なんてできなかつた。ところより、家はなんだか道場みたいなところでよくわからぬもの教えていた。

まあ、そんなことより僕は毎日学校に行つている。

しかし、今日はちょっと学校にいくのが遅かつたので遅刻しそうなんだけど・・・。

こうこつときは裏山を突つければ学校に早く着くことができる。爺さんが言つにはこの山は危ないとか言つがどこが危ないのか僕にはわからない。そして、僕は山に小走りで入りさつさと出て行こうとした。だが、普段から行ったことのない道だったので迷ってしまい、困つたことになった。うろづろしているとさらに不幸なことが起こつた。

赤い蛇みたいなものが僕を見ているのだ。

その蛇は鋭い角が生えていておまけに手まで生えていた。僕はなんだかその蛇がかわいいと思つてしまい、近づいてみた。

じゅつ・・・

蛇は僕の身長ぐらいは間違いなくあり、おとなしかつた。もとから動物は好きなほうだったのでこんなことができたのかもしない。僕は蛇の頭をなでた後にその体に生えている蛇のうろこを触った。硬くてなんともいえない感触だったし、初めての体験だった。僕は学校に行くことも忘れてそのまま蛇の体に体重をかけて眠りに入ってしまった。

夢でどこかで見た男の人がいた。その男の人は優しそうな顔でこういった。

「・・・輝、その年で女の子をくどいちゃだめだぞ？あと、明はボンキュボーンな人が好きか？」

「あんた自分の息子に何いってんのよ？」

隣から女人の人が出てきてその男の人に飛びげりを喰らわせた。男の人はそのまま向こうに転がつていつた。

「・・・輝、『我が名において命ずる、眞の姿を見せよ。』といつて『さらんなさい？』これを唱えるといいことがおきるわよ？」

「そんな販売セールスみたいな手で僕の子供が騙せる訳ないじゃないか！」

「うるさいわね、別に騙していないからいいじゃないの……」

その二人は喧嘩をはじめた。見ていて飽きなかつたのだが、先程、女の人があが教えてくれた呪文みたいなものを唱えてみる。すると、その二人は目の前から消えて、代わりにショートカットの女の子が姿をあらわした。

以上が、僕と穂乃香との出会いである。後半へ続く！！

「爺さん、後編はどうだ？」

「・・・」の前、水につけて壊しちゃつた。てへつ？

「まあ、いいや。穂乃香も人間じやなかつたのか？」

「そうみたいじやなあ。お前さんが竜の心を見ることがたまにあるじやろ？」

「ああ、さつきもあつたなあ。」

「それはおまえさんに心を許している竜にしかできないことじや。おお、そろそろ、お天気コースのお姉さんが始まる時間じや・・・輝はさつさと浮世に帰れ。」

「わあつたよ。じゃな、爺さん。」

俺は田を覚ます。あたりは真つ赤につつまれている。

「・・・アキ、大丈夫！！」

「ああ、大丈夫だ。いつへん死んだ爺さんと話してたがな・・・。」

「冗談を言えるつて」とは大丈夫だよね?」

ま、本当のことなんだが別にいいか。そんなことより早くしないと学校に遅れてしまう。こんなところで寝ている場合ではありますねえ。

「あ、輝さん!！」

「輝、おいていかないでよ!」

「起」してくださいよ、輝君。」

俺は後ろを振り返るとそこには三人がそれぞれきちんと制服と白衣を着てこっちに走ってきていた。

「・・・・アキ、の人たち誰?」

「ああ、俺の友達かな?右から、葵、加奈、碧なんだ。」

近くまで走ってきた葵は寝ている俺を起こす。そして、俺に尋ねてきた。

「輝さん、この人、誰ですか?」

「ああ、この人は俺の幼馴染で・・・。」

「香山 穂乃香つていいます。」

それぞれがそのまま自己紹介し、いや、正確に言うと碧さんは詳しく穂乃香ちゃんの事を知っていた。そりやもう、好きな食べ物から体重、身長、スリーサイズまで・・・

「・・・・先生ってそんなに物知りなんですね・・・プライバシーも意味がない見たいだし・・・」

「ついでに言うなら、コンプレックスは胸の大きさですね？」

穂乃香ちゃんは葵、碧さんを見てぐつと唸った。完璧に負けていると実感したのだろう。だが、加奈を見て何とか自尊心が修復されたようだ。

「・・・輝、何が言いたいのよ？」

「大丈夫、まだ君は幼いよ。」

「余計なお世話よ。」

気を取り直して学校に向かう。だが、歩き出してすぐにチャイムが聞こえてくる。ああ、今日はちじくだあ。

「しゃ、しゃれにならないよーー転校早々、遅刻だなんて・・・」

まだ、まだ諦めてはいけない。先生が教室に入る前に滑り込めば何とかなるに違いない！－ラツキーなことに俺たちの担任は碧さんだ！－この人天然みたいなところがあるからきっと足が遅いに違いない・・・つて、はやあ！－

「さあて、今日の遅刻は三人ね？」

「みんな、負けるんじゃないぞーー！」

俺は遅れ気味となつているかなの手を掴み全速力で走り出した。
ああ、朝から全力のダッシュなんてこの先の授業が思いやられるぜ。
だが、俺と手をつけないで走っていた加奈は碧さんより早くに校門に
はいることに成功した。

「な、なんとかまにあつたあ。」

「そ、そうね・・・・」

「」の学校では遅刻してきたものは掃除をしないといけないらしい、
今日の遅刻者は三人。碧さんと、葵、穂乃香ちゃんである。（碧さ
んは先生の中で最後だつたらしい。）

輝の過去は前編だけ？（後書き）

だいたい、後はこのメンバーで行きたいと思います。基本としては・・・まあ、これからは大体あのおばさんがかかわってきますのでよろしくお願ひしますね？いや、おばさんの活躍ではなく、輝の活躍ですよ？

道場へのつらべ泣きたくなる道のり

十五、

今日もいたつて平和に終わる……いや、いろいろと騒動があつたなあ。中学からの友達が彼女と一口中ラブラブだつたので頭にきて悪戯したら本氣で襲つてきたなあ。あれは正直びつた。

「輝、これからどうかに行くの?..」

「ああ、おばさんが言つてたろ?..」

今日は道場を探してみる予定だ。できればこんな時代錯誤みたいなことはしたくないがおばさんのお願い(命令)を足蹴にするのも心を痛める。(つこでに言つながら体もぼりぼりになるに違いない。)

「加奈、悪いけどついてきてくれないか?..」

「い、いいわよ。」

加奈は承諾してくれたのでよかつた。おばさんが言つてたことは誰かと行けとついてよくなきがするし・・・。

「そんなことより体は大丈夫なの?朝ひき逃げにあつたそりじゃない?..」

俺を撥ね飛ばしていつた車はそのまま行方をくらましたしつたのだ。悪いのは俺なのでここで文句をついても始まらないと思つのでそのままにしていいだろ?。

「加奈、ちょっと先にお礼をさせてもらひつよ。何か食べにい
じりへ。」

「え・・・・一人で？」

「ああ、誰も誘う人いないし・・・」

加奈は難しそうな顔をしていたが何をそんなに考えているのだろうか？

そして、加奈は俺の前の席でアイスを食べている。いやあ、俺の微妙に薄い財布はそろそろ平地になろうとしている。まさか加奈が頼んだアイスがここまで高いとはまったく思っていなかつた。

「・・・・輝、頼まないの？」

「・・・・いや、実はお腹がいっぱいです・・・」

目の前であんな大きなアイスを食べられていたら俺は腹いっぱいになってしまい、何も頼む気にならない。むしろ頼んでしまったら俺の財布は間違いなく持っていても意味のないものになる可能性がある。いや、絶対だ。

「けど、そのアイスはそんなにおいしいのか？」

加奈の顔はとても幸せそうだった。知り合つて・・・（いや、まだぜんぜん経つていないが・・・）一番の笑顔だ。

「・・・まあ、誰かと一緒に食べれるからおこしいのよ。」

そんなちょっと背伸びしたような台詞はこの顔からは出されると
は思わなかつた。いやあ、生意気な小娘だねえ。だけどとも幸せ
そうな顔をしているから否定するようなことはできないなあ・・・
と、目をつぶつて考えていると店内から

「おお！－！」

という声が聞こえてきたので目を開けるとそこにはとてつもない量
が・・・まだ半分以上残っていたバケツ並みのアイスが消えてしま
つた。そして、代わりに口の回りをアイスまみれにした加奈が俺の
顔を見ている。

「・・・・口の周りにアイスがついてるぞ？ほれ、拭いてやるから
こっちに顔近づけろ。」

あえてどこかに消えてしまつたアイスに付いては触れないでおこ
う。周りの人たちからの好奇心丸出し・・・特に加奈への視線が
鋭い気がする。

「ん、ありがと・・・」

俺は急いで加奈の手を引き逃げるようにその店からでた。今度大
食いの店に連れて行つたら面白いかもしないなあ。俺はそのまま
道場の集中しているところに向かつて走つていつた。

あたりは夕焼けに包まれていた。ついでに言つなら俺を見て回り
の大人はひそひそ話しあつてゐる。

「・・・奥様、あれつて誘拐ではありません？」

「まあ、恐い・・・警察は何番だったかしら？」

じゅぢゅ俺が手を引いているので加奈を誘拐しているように見えるようだ。俺は加奈の歩調に合わせることとした。そして、握っていた手を離す。

「……加奈、じゅぢゅ俺は誘拐犯のように見られてるようだ……」

「うん、事実輝は私を連れてきたからそうよな?」

近くのおばさんたちが更に声を低くして話し始める。

「…………」

「…………じめん、冗談よ。だからそんな泣きそうな顔しないでよ。」

ああ、マジで泣きたくなつてきた。俺つていつから犯罪者のレッテル張られてんだろうか?

「だ、だからほんと……今では輝に会えてよかつたと思えるんだよ?」

「…………へっ…………」

男が泣きたくなる時は……玉葱を切った時と、股間を蹴られた時、最後に変質者に女と思われて押し倒されたときだと爺さんがいつていた気がする。……まあ、それに襲つてもいい相手から犯人者にされるのもぜひとも加えてもらいたいものだ。

「ほり、手を握つてあげるから泣かないでよ?」

加奈が俺の手を握つてくれた。瞬間、俺の頭に電撃が走った。

やれやれ、輝は本当に高校生かしらへまつたく、誰かがいないと
すべに泣きそうな感じだし・・・。

「加奈、言つていい」とと悪じことがあるんだぞ?」

俺はなんだか小学生に泣き虫といわれたような感じになつた。あ
あ、マジで泣きたいわあ。

「・・・あなたこそなんて思つてんのよ。私は輝の妹じゃないわよ。

「

加奈はそう言いながらもしつかりと俺の手を握つてくれていた。
俺には妹も姉も弟も兄貴もいないので「このひとは」とも思はれしか
つた。ついつい顔が緩んでしまつ。

「まあ、きっといかがわしいことを考えておりますわよ……奥様……」

「ほんとねー!今すぐ警察を呼ぶべきだわ!—」

俺はこの道を一度と通りたくないと思った。もし今度誰かと手を
つないでいたところを見られてしまつたら今度は間違いなく警察官
がきそうだ。

それから少しして、いろいろな看板を掲げた道場が見えてきた。
どれも聞いたことのないものばかりで……ネーミングセンスが
いまいちだと俺は思う。

「…………やで、エリの看板をもりえぱいいんだ？」

「あ、あれでいいんじやない?」

加奈が指差したといふの道場は彼女にとつてはいといふかもしない。

その名も・・・『電撃道場』と、見た目的にも派手な道場であった。いや、こんなところの看板なんて俺はこらなこと思つただが?

「たのもーーー看板をよこしなさいーーー」

加奈はさつと道場の門を叩き、道場破りを宣言している。ああ、このまま彼女に任せたほうがいいのかもしれないな。

「・・・・ふ、いいだろ?・・・門をたたいたことを後悔するなよ?
?」

誰かの声が聞こえてきて、門が自動的に開いたのであった。

道場へのつらべ泣きたくなる道のり（後書き）

えーなんだか加奈とあまり関係ないようになつていていたので今回、やつてみました。どうだったでしょうか？できましたら感想のほうをよろしくお願ひします。

飼い犬に手をかまれる・・・

十六、

中はこの前の道場と打って変わつてかなり大きかつた。池もあり、鯉が悠々と泳いでいる。

「…………」道場つて言つよつは日本庭園じやない?」

「言えてるわね。」

そんなことを加奈と話していると奥の扉が開いて誰かがやつてきた。

「…………よつ」や、私の道場へ・・・愚かなネズミたちは黒焦げになつてもらおうか?」

どうから見ても危険なにおいがする人物である。俺としてはこんな相手が持つてている看板を持つて帰るのは気が引ける。

「君たちには新型兵器の実験台になつてもらおうか? なあに、痛いと思つてこる暇はないよつに改良されてこらね。」

「こんな相手と話している時間があるくらいならしりとりしているほうがまだましだ。俺はおもむろに彼に近づきしゃべつているのを承知で頭を思いつきり殴つた。

「んがあ。」

「…………すいません。看板はもらつてこきますね。」

こんな相手ならこの前の道場の何とか先生のほうがかなりました。
まあ、このまま看板をばくつて持つて帰つてしまおう。

「加奈、先に看板を持つて家を田指していくれないか？俺は救急車を呼んでおくから……」

「わかつたわ。」

俺は道場の中に入り電話を探した。中は外見から想像できないほどに文明化が進んでおり、田を奪われるようなもの結構ある。

「・・・くくく、自らわなに飛び込んでくるなんて間抜けなネズミさんですね。ここには侵入者を撃退するように作られた『電撃君一号』が多数配置されているのですよ。ここに入ってきたものは・・・」

「

ぴぴーっ

ぱりぱりぱり・・・

俺の田の前でここに持ち主は黒こげとなつて倒れた。だが、その田にはどうだといわんばかりの色が宿されている。

「・・・・」のようになるのですよ。がくり・・・

うわあ、きっと彼は今、身を持つて自分が作った『電撃君一号』を自慢したに違いない。すげえガツツだ。俺だつたらすぐ逃げ出すと思つね。

「つと、そんなこと思つてゐる場合でもないみたいだ。」

俺の周りには数個の侵入者迎撃装置が俺を狙つている。

丸い体の中央には大きなカメラが設置されており、体はプロペラで浮かんでいるようだ。しかし、思つていたみたいに俺に積極的に攻撃しようとは思つていなか俺の周りを旋回しているようだ。先ほどから頭にはこれ以上近づいたら攻撃を開始するという文字を浮かべている・・・・と、その一個が電撃を放ち爆発した。

「輝、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ。多分、」

これで俺たちは間違いなくやつらの敵である。今までこれ以上の進行をしたら電撃を放つようになつたが攻撃をしたのではつきりやつらのおとなしそうな青い目は赤く点滅しており、俺たちをにらんでいるに違いない。

「加奈、走るぞ？」

「え・・・私走るの苦手・・・・

そんなことを言つ加奈の体を抱えて出口に向かつて走り出す。先ほどまで俺がいたところには強力な伝劇が当たつているようで耳を劈く音がしきりに聞こえている。

「・・・・ぐあああああ！」

どうやらひとつが自分たちの主人に当たつたようだ。断末魔のよ

うな叫び声を上げている。まあ、悪いのは俺たちかもしれないが今回だけは大目に見てほしい。

「輝、助けてあげたんだから私のお願ひ聞いてくれる?」

いやいや、たとえるなら俺ががけに捕まっていたところをお前は俺の手を踏みにじつた拳旬にその崖から突き落としたのだと言ったくなつたが・・・純粹に俺を助けようとしたので今回だけは見逃してやろう。俺は首を縦に動かした。

「輝、今回は加奈と一緒に行ったのかい?」

「はい、いろいろとありました。看板はゲットすることに成功しましたよ。後これはお土産です。」

俺の手に握られているのはあの道場にいた大きな鯉である。これを売つたら結構な額になるかもしれないと思つてバケツに入れて連れ帰ってきたのだ。

「ほう、すまないねえ。まあ、これで私の夢にも近づいてきたことだし・・・輝が知りたいことを何か教えてやろう。」

やつた!!俺として走りたいことが多すぎるのとどれにするか迷うのだが・・・ひとつだけ気になることがある。

「竜つて何ですか?」

「ああ、簡単なことだよ。想像上の生き物・・・つまり、誰かが作り出したものだ。あんたになついている竜はその昔・・・・どこか

の実験の結果として生まれたものだ。意外に最先端なのがもしかないねえ。さて、今日は鯉の分としてもひとつだけ質問に答えてやるわ。」

「ちすがおばさん……三段腹ですね。」

「それをこつなら太つ腹だ。ふぞけると明日は来ないよ。」

「冗談です。おばさんは看板を集めてどうするんですか？」

「この世を統一する。」

は？この人はそんなことをほんとにしようとしているのだろうか？疑問が残つたのでもう一度俺はおばさんに聞くとしたがおばさんは晩飯の準備をしに部屋を出て行ってしまった。

今夜のおかずは鯉こづであつた。……もしかしてこの鯉は俺が盗つてきた鯉か？まあ、鯉は財布の中に入らずに俺たちの腹の中にその優美な姿を消していった。

「輝、一緒にお風呂に入つてよ。」

「ああ、わかつた……！」なにこつてんだ？

「お願い事聞いてくれるつて言つたじゃない。」

結局のところ、俺は加奈と一緒に風呂に入ることになった。

俺としてはかなり不満だが……いや、別に加奈の幼児体系が問題

ではないのだが・・・まあ、もうなんだかどうでもよくなつてしまつた。これから俺の人生は流れしていくだけに違ひない。流れしていく果てにあるものは何なのか俺としてはまったく想像しないのだが・・・できるならハッピーハンドになつてほしい。

「輝、今度は一緒に寝ましょっよーーー！」

「うえええーーもしも・・・まさかのまさかで・・・間違いが起こつたらびっくりするんだよーーー！」

いや、俺にハッピーハンドはむかないのかもしれないな。

飼い犬に手をかまれる・・・（後書き）

ちょっと遅くなつてしましました。すいません。だけど今度から
はがんばっていきたいなあ。

十七、

俺は今、自分の部屋で悩んでいる。なぜ、悩んでいるかといつと・
・すべての責任はおばさんにある。

今日は日曜日。部活に入っていない俺は田舎課となつているランニ
ングをした後に朝食を食べに家に戻ってきた。

「輝、たまには頭も使うトレーニングをしたらどうだ?」

田舎焼きを口に運びながら俺は考える。こんなことをおばさんが
言つてくるのには何か裏があるはずだ。一応覚悟して聞いてみる。

「……何か案もあるんですか?」

「そうだ、お前がもしも誰かと結婚した後のことを考えちゃう。
輝は夢とこつものを持つたことがないからな。」

「け、結婚ですか? それと夢が何か関係あるんですか?」

「さあな。ああ、状態は新婚状態がいいな。相手は誰でもいい。
私が家に帰つてくるまでにそろえておけ。」

おばさんはそつこつた後にすぐに出て行った。この家にいるのは
犬と俺だけ。三匹の竜たちはどこかに行つている。俺はため息を出
してから自分の部屋に向かつた。

まず、相手がいるのかどうかさえわからない。今までした会話し

た」がある粗手でこつこつと糸を引く。

（葵の場合）

俺は今、誰かに強く揺さぶられている。まだ田を開けるのにかなり早い時間である。

「輝さん、おはようございます。」

すでに着替えたのかパジャマ姿ではない葵。今日も彼女の顔はすつきりさわやかといった調子である。俺は田の下に熊をつくってそうな感じであるがしそうがない。昨日は夜遅くまで葵と外で遊んでいたのだ。

「や、おきてください。」

「……わかったよ。」

さつと起き上がるにして、一階に降りていく。家に住んでいるのは俺と葵だけだ。引越しをしており、一人だけの空間。台所に立つて味噌汁をついでいる葵の後姿を見つめる。なんともいえない感じになり、田をそらす。顔がほてってきた。

「輝さん、どうかしたんですか？」

「い、いや・・なんでもない。」

葵は不満そうな顔になる。そして彼女は俺の手をおもむりにつかむ。あわてて手を離さうとしたがどうやら遅かったようだ。葵の顔が赤くなっている。

「・・・私たち夫婦なんですから、後姿を見ている」と覗き見なんてなりませんよ。」

「・・・そうだな。」

葵相手に嘘はつけない。それはある意味おつかない事実だ。俺は彼女が作った味噌汁を口に運ぶ。今田もまざい。

「・・・葵、今日もまざいぞ。」

「・・・うですか？輝さんの味覚がおかしいんじゃないんですか？」

俺から言わせてもらえばなんでこんな物が飲めるのか・・・。味噌汁が入っているなべを見ると魚の尻尾が突き出ている。近くまで行ってみてみるとおまけなのか今日はザリガニがいい湯加減になっている。

「葵・・・」

「はい？」

俺は振り返つてこの味噌汁なのか何なのかよくわからないものを作った本人を見る。葵は口の中にザリガニのはさみを放り込んでこつちを見ている。まだ動いているような気がするのだが・・・。

「・・・葵、味噌汁の中にザリガニを入れるのはやめてほしいんだが？」

「椎名さんがこの前いれたらおこしにっていったんですよ。ほんとにおいしいんですね。」

おばさんか口ぞえしたよ。葵はすんなりと人を信用してしまつことかよくあるので困ったものだ。俺は味噌汁はあきらめてご飯を食べることにした。ご飯はおいしく作つてあるのではつとする。

「輝ちゃん、今田まじかに行きませんか?」

「あ・・・そうだな。行こうか?」

俺は一匹目のザリガニを口に放り込んで話しかけてくる葵に肯定の言葉を投げかけた。ザリガニを口にいれた状態でよくしゃべるけどができないなあと感心してしまつた。

俺は流しで食器を洗つことにした。葵は近くの水槽に近づいて何かをやつしている。

「葵、なにやつてんだ?」

「ハイテとアズナブにえさをやつてこらんどすよ。」

見るとそこには大きなザリガニが一匹入つていて、なぜか喧嘩もせずに仲良く水槽の中に納まっている。

「・・・・・それ、飼うのか?」

「いえ、今度の晩御飯にする予定です。」

「・・・・・そつか・・・・・」

俺はため息をついた。

（葵編終）

「はあ、やっぱり葵が相手だと疲れそうだな。」

机に座りなおしてから大きなため息をつく。まだおばさんが帰つてくるのには早いだろうが・・・ちょっと難しい。

「冗談でザリガニの話をしたのだが、あながち起こりうでかなり怖い。

「・・・輝さん、ただいま戻りました。みてください、大漁ですよ！..」

どこかに行つていた葵がそんな声をだしながら俺の部屋にまっすぐ向かつてくる。背筋が寒くなつたのは気のせいであつてほしい。

「輝さん、ほら、みんな新鮮ですよ。」

バケツいっぱいのザリガニを持つて葵は俺の部屋にやつてきた。俺はただただ、そのザリガニ眺めるだけであつた。

「葵、もしかしてだが・・・」うちの大きいのが・・・ライテヒアズナか？」

「どうせ違つだろ」と思いながらも葵にたずねてみる。

「ええ！..なんでわかつたんですか？」

葵はなんだか驚いているような顔をしてくる。まつりと、あてなることがあるので聞いてみることにした。

「……葵、いつの小さいザリガ一たちが食べたらおこしいかな？」

「はい、ちょうど私も食べよつと思つたんですよ。刺身にしまじょうか？それとも踊り食いがここですか？」

嬉々として俺にそんなことを言つ葵を見てため息をつくしか俺はしなかつた。

未来予想図? 1 (後書き)

少し出すのが遅くなってしまいました。ごめんなさい。

未来予想図? 2

十八、

俺は、頭を抱えて悩んでいる。葵が持ってきたザリガニのこともあるが、おばさんから言われたことがまだ終わっていないからである。

「輝ちゃん、顔色悪いですよ？」

ザリガニをゆでて来て、口の中にほおばって喋っている葵を見る。どこかで見たようにその口からはさみが飛び出している。ゴリゴリといやな音が一定のリズムで俺の脳内を暗いままに導いている。

「・・・葵、ちょっと散歩してくるから・・・留守番を頼んだぞ？」

「私も行きたいのですが・・・？」

俺は首を横に振った。葵と一緒に歩いていたら再びザリガニを捕まえに行くことになる可能性がある。ザリガニは苦手ではないが、ザリガニを食べている葵を見るのはちょっと抵抗がある。簡単にたとえるなら氣ぐるみの中から人が出てくるようなものだ。

「じゃ、こいつてくれるわ。」

「はー、こいつらしゃい。」

俺は家から出して歩き出した。そつだ、相手を変えてみると元気になれる。

（加奈の場合）

俺は朝の光で目を覚ます。カーテンからもれる光が目に厳しい。そして、隣でかわいい寝息を立てている加奈を見る。

「…………」

撤回、凄いいびきをかいている加奈を見る。よだれも少々……いや、これ以上言つとなんだか可哀想な気がしたのでやめておこう。俺はそんな可愛い寝顔の加奈の鼻に人差し指を突きつける。いつもでも見えていいが……朝からはちよつと刺激といつかなんといつか……ととりあえず起こすことにする。

「加奈、早く起きるよ。」

「…………むう…………」

鼻をつつくが起きよつとしない。幸せそうな顔をして寝ている。やれやれ、しちうがない奴だ。

「加奈、早く起きないと…………」

「…………ぱくつ…………」

ちい、味なまねを……。こいつ俺の指を噛みやがった。

「ガジガジ…………」

「いてえ……」

しうがない奴だ。いつなつたり強硬手段・・・布団をはがしてから顔に水をかけるしかないな。

「せつやあーー。」

「・・・わやあーー。」

布団をはがすついでに加奈までベッドから落ちた。俺のせいじやないもーんーー。いつまでも起きない加奈が悪いんだもーん。

「加奈、おはよー。」

「輝、起こすときはもいつもひょりとやれこへ起こしてよ。たとえば耳元でおはようとか・・・」

「こつは朝から何をこつてこるんだ?・まったく持つて・・・

「わかつた。今度はしてやるから早く着替えろよ。」

「輝もまだ着替えてないじゃない。」

ぶすっとした顔で俺に文句を言ふ。いやあ、見ていて和むねえ。

「加奈、そういう顔しても可愛いな。」

「ふん、おだてても無駄よ。」

そんなことを言つが顔は真っ赤だ。いつした仕草や態度も可愛いもんだ。・・・いや、寝顔だけはやっぱり勘弁してもらいたいかも

しれない。

「輝、今日は何か予定ある?」

田の前で服を脱ぎだした加奈を見ないように答える。

「いや、暇だ。」

「じゃ、どこかに行こうっ!」

俺は答えとして頭を下げて部屋を出て行つた。後ろからは加奈に馬鹿にされている証拠の言葉が返つてくる。

「別にいいのに・・・」

いや、俺としてはどうかと思うのであえて一階に降りていくことにした。やれやれ、加奈のあの体系を見ててもあんまりよいこばねえよ。

どこに行こうか考えながら新聞を眺める。今日の一覧には凄いものが載つていた。

『平和な町の商店街で雷が落ちる?奇跡的ながらも怪我人はゼロ!』

俺は目眩を感じながら新聞をたたむ。そして、丁度降りてきた加奈に聞いてみる。

「・・・加奈、昨日商店街に行かなかつたか?」

思つたとおり、加奈はびくつとして俺に向ける視線を伏田がちに

する。

「いや……行かなかつたわ。」

加奈の手をとる。それで簡単に加奈が嘘をついているのがはつきりとわかる。

「加奈、俺は別に起こつてなんかいないんだぞ?」

「…………うん、わかってるわよ。」

加奈はたまに放電する癖があるらしく、何か嫌な事があるとあたりかまわず電気を放出。それにより、ストレスを発散せるらしい。いや、まったく困ったものだ……。

（加奈編終）

バリバリバリ……

俺は音がした方を見る。晴れているのにその方向には一筋の閃光が空を切り裂いた。ちょっと不安になつてその方向に駆け出す。駆け出した方向から加奈が走ってきたのが確認できる。どうやら泣いているようだ。しかし、俺を見ると涙を引っ込みでしかめつ面を作る。

「……どうした……小学生にでも間違えられたか?」

そんな冗談を言つと、加奈の顔はいつそくに酷くなる。これは加奈と俺がはじめてあつたときと同じ表情だ。雷が俺に直撃する可能性は高い。

「加奈、悲しいときは思いつきり泣け、俺が聞いてやるからな？しつかり受け止めてやるからね・・・」

命の危険にさらされて俺は加奈をなだめることにした。加奈は泣き顔に戻り、俺に向かって走つてくる。

「輝あ・・・！」

ぱりぱりぱり・・・

俺の胸に飛び込んできたのは加奈だけではなく、雷とこいつおまけつきであった。

未来予想図? 2（後書き）

ちょっと続いてしまいました・・・ほんとはもうあとで書くつもりでしたが・・・まあ、しょうがないことです。語感想などをお待ちしておりますのでよろしくお願ひします。

十九、

加奈が俺に対して雷をまとったまま突撃してくれたおかげで俺は今、体がしびれている。死ななくてよかつた。いや、ほんとによかつたあ。

「……加奈、もう大丈夫か？」

「……」

泣きやんだ加奈を離して家に帰らせることにした。誰か知らないが加奈のことを小学生したらしく、そのため、この晴天の中ものすごい雷が落ちたのだ。とりあえず加奈の機嫌が直った事でよしとしておこう。これ以上何かを求めたら俺は神様に怒られてしまうに違いない。

「加奈、ちょっと散歩しようつか？」

「…………いや、いいわよ。私は先に家に帰つておくから……」

そういうて俺からぱつとはなれて家のある方向とはまつたく違うほうに駆け出す加奈。

「おーい、家はあっちだぞ？」

すでに見えなくなってしまった加奈はほりつておいても大丈夫だね。あの子は小学生ではないから……

「さて、俺もおまえさんから言つて渡された課題を答へよ。」

「嘘の場合」

「輝君、朝ですよ？」

輝さんが俺を起しつけて、ふすまが開く音がして、足音が俺の隣で止まる。

「ほひ、おはようござりますー。」

俺の顔のすぐ傍でそんな事を言つて居る。だが、俺としては甘えていたい・・・。

「・・・・輝君の寝顔は本当に可愛いですねえ。とっても魅力的です。」

「がぶり！ ！ がじがじがじ・・・・

「いたいたいたいたいたいた！」

「輝君、おはようございますー。」

どうやら強硬手段をとられてしまったようだ。俺は歯みつされた頭をさすりながら体を布団から起します。ベッドではないのは嘘さんが意外に布団のほうが多いと言つたからである。そんなことほんとおき、俺はまだ痛む頭をさすつて立ち上がりつとする。

「ほひ、輝君・・・・」

しかし、碧さんが俺の体を寄せて抱きしめるようなことをする。そして、俺の頭・・・齧られた部分を手で撫でる。

「ほひ、もう大丈夫かな？」

「は、はいーー起にしてくれていたのに気がつかないですみません。」

もとはといえば俺が悪いのだ。ここは素直に謝つておこう。だが、碧さんはそんなことを別に気にしていなかつた。

「・・・もひちよつといつしていたいなあ。ね、いいかな？」

「もううん・・・。」

だが、こんな良い雰囲気は俺にはもつたいないのかとあるものが俺と碧さんを引き離した。

ピーッー！

「あらり・・・大変。やかんがなつてるわ・・輝君、もう布団に戻つたら駄目だよ？」

そういうて碧さんは全く慌てていらないような感じで俺から離れていった。たかがやかんごときで俺の朝の心安らぐ時間を引き裂くとは・・・・・。俺は立ち上がりパジャマを脱ぐ。そして、スーツに着替えようとして手を休める。今日は休日であった。

「輝君、朝食ができたわよ？」

「はい、今行きます。」

食卓の上には和食の朝である味噌汁やご飯がのっていた。どれも豪華ではないがおいしそうである。

「はい、輝君・・あーん！・！」

こんな嬉しいおまけまでついているから俺にはほりたいないと思う。だが、世の中ギャブアンドテイク。

「いや、耀さん・・それ無理！・！」

何も魚をそのまま俺の口の中に押し込めなくては良いのではない
かと俺は思う。そりゃまあ、してくれるのはとっても嬉しいが・・・
・その大きさでは俺の口の中におさまることはないだろ。食道の
途中で止まつてもしかしたら死んでしまう可能性もある。

「やうですか？」

「はい、ちょっと無理だと思こます。」

耀さんのことこのは相手にだけさせることはしない。自分でもチャレンジするのだ。そして、俺にはできないことを彼女は軽々やつてのけた。そして、行儀よく口の中にきれいに収まつた魚を胃に入れてから俺に話しかける。

「まじ、私でもできたんだから多分大丈夫ですよ。」

「いや・・・多分じゃなくて絶対無理ですよ。」

「できますよ……だつて私の輝君ですから……」

顔を赤くしてそんなことを言つ碧さんに俺は無理を承知で魚を口に押し込んだ。顔を赤くした彼女は俺の宝物だ。だが、人間ならできなことはやらないほうが良い。

「むぐうう！！」

「きやあ！大変！……人工呼吸しなきやーー！」

「嬉しいけど……まずは何か飲み物をくださいーー！」

（碧編終）

うん、あの人なら天然で俺を殺しかねんな。きっとこの後俺は口を塞がれて嬉しい感じで爺さんが待っているところに召されるに違いない。

「輝君、顔色が優れないんですが……どうかしたんですか？」

「あ、碧さんじゃないですか……」

天然で人を殺せる竜が俺の顔を心配そうに覗き込んでいた。その手には本を持っている。

「それより碧さんはどこに行つてたんですか？」

「ええ、ちょっと本屋にいつてたんですよ。先生になるには人工呼吸や心臓マッサージを知っておいたほうが良いといわれたんです。」

そういうえば輝さんは偽者がどつかはわからないが先生であった。

「輝さん、頑張って下さこよ？」

「はい、輝君がそんな状態になつたらがんばりますね？あ、試しに人工呼吸をしていいですか？」

俺が必死に遠慮したのは言つまでもない。なぜなら、彼女が買つてきた本はまだ封を切られていなかつたからである。このままいくと俺は数分後に爺さんに会いに行かなくてはいけないだろう・・・。

未来予想図？4

二十、

車がほとんど通りていらない道を轟さんと話しながら一緒に歩く。彼女の歩き方は一言で言つと優美である。

「輝君は何で部活にはいらないんですか？輝君のクラスの男子はすべて部活にはこなってるでしょ？」

「・・・予習とかする時間がないから部活にはいらないんですよ。それに・・・部活に入っている連中と入っていない奴等はちょっとみぞみぞみたいなものがありますからね。」

端的にいうなら部活をやっている連中は彼女がいる。運動部なら休日などの練習試合にも自分の彼氏を応援しようと彼女たちがやってくるのだ。そして、文化部なら彼女と一緒に入っていちゃつ正在中の連中もいる。俺は一日田・・・入学式のときに部活動をするを見てまわったからわかる！－俺は彼女もいないからなあ・・・。もてない男はつらいぜ。

「あ、ちよつと学校に用事が残っていたのでちよつと行つてきますね。」

「はい、いつてらっしゃい。」

俺は一人になつたので再び集中して考へることにした。もう、時間がない。

（穂乃香の場合）

俺は目を覚まして隣で可愛らしい寝顔の幼馴染を見やる。

「…………」「

しかし、実はこれは間違いなく嘘の寝顔だ。穂乃香ちゃんは相手を油断させて敵を倒す。どこからともなく木刀を出して相手がナイフを持っていたとしても勝つてしまふに違いない。

「アキ、隙あつい！！」

寝ている体勢でそのまま俺に木刀を振り下ろす危険度が高い幼馴染。だが、俺はそんな木刀を押さえつけて相手の体に馬乗りになる。

「まったく、朝から危険なことをしない！！！」

「だつて、隙があつたんだもん。」

そんなことを言つ彼女はまるであのころのわがまま娘だ。俺が小学一年の最後に不良から救つてあげた後はちよつかいを出さなくなつたんだが・・・。

「ほら、朝食を作るから起きてくれよ。」「

「ねえ、私のこと嫌い？」

突然のことでの俺はびっくりしたが・・・なにを言つているんだ？

「嫌いならいつでも木刀を俺に向かってくる穂乃香ちゃんの隣にはい

ないよ。何か悪いものでも食べたのか？」

「だつてさ、なんだが……避けられている気がするんだよ。」

俺はとりあえず彼女からぞいで虚言でも言つてはいる自分の妻の顔を見る。そんな彼女は俺に向かつて再び木刀を振り下ろす。俺は難なくそれをよける。

「ほら、また避けた！..！」

「そりやよけるわー！あたつたら痛いじやすまないだりつー！」

彼女の一撃はとつても重い。木刀でたたかれるのではなく、電柱があたるよつた感覚に違いない。

「じゃ、次の一撃は絶対に避けないでね？」

そして、そういうたたかは俺に抱きついてきた。無論、俺はその攻撃をしつかり受け止める。

「・・・・おはよ、アキ・・・・」

「ああ、おはよう・・・・穂乃香ちゃん・・・」

朝からラブラブ・・・なのははつれしいことだが彼女相手に隙を見せてはいけない。これは彼女なりのテストなのだ。俺がここで隙を見せれば・・・彼女は容赦なく木刀を俺の体のどこかに直撃されるに違いない。そして、俺は彼女に嫌われるだらう。

抱き合つたまま、数分の時間が過ぎる。

「アキ、腕を上げたね……そろそろ……朝ごはん食べよつか?」

「そうだな。」

ふうー緊迫した時間であった。見ると彼女の額にも汗が吹き出ている。そんな彼女の右腕にはいつの間に握ったのか先ほど落とした木刀がしつかり握り締められていた。

朝はトーストとサラダ……そしてオレンジジュースで軽くすませる。その後は彼女の日課となっている素振りを隣で見学する。

「……アキ、今日はどうかに行こつか?」

俺は思いつきりしかめつ面をした。俺が一昔おばさんといわれてやっていた看板のお使いを穂乃香はどうからか聞いてきたのだ。それ以降、彼女は道場を片つ端からつぶしていっている。その勢いは誰にも止める事はできないだろう。

「……いや、今日は一緒にお菓子でも作ろつか?」

俺はお菓子作りをするのは苦手だが、こうすることによつ低い確率だが彼女を道場破りに行かせないですむ。

「そうだね、そり jóうか?」

じつして俺は何とか家の看板が増えるような自体を安全な方向に導くことに成功した。しかし、彼女とお菓子を作るのはかなり大変だ。何事も真剣で熱血的な性格の穂乃香ちゃんは自分なりに完璧になるまでやめることを知らない。それはもう、お尻に火のついた

猪のよつなもんだ。

「じゃあ、今日は・・・ホットケーキを作ろつか？」

「うそ、まかせておいて！..」

こんな簡単なお菓子でもスイッチを押した彼女は止まらない。きっと残りの食事（昼食、三時のおやつ、夕食、夜食。）はホットケーキになるだら。もしかしたら明日のお弁当もそつなるかもしない。

俺は道場のみんなの代わりに自分のみを犠牲にしたのだ。ああ、誰かが喜んでくれると救われるんだが・・・

「全力でいくよーー！」

（穂乃香編終）

結果として俺は・・・どれも微妙なところで終わってしまった。
これではおばさんに何を言われるかたまたものではない。

「アキ、どうかした？」

「うわあーーなんだ・・・穂乃香ちやんか・・・

まるで夢遊病患者のような歩き方になっていた俺の目の前に現れたのは何事にもまじめな幼馴染であった。

「大丈夫？もしかして・・・誰かに襲われたとか？」

「いや、大丈夫だよ・・・・」

そう心配してくれる穂乃香ちゃんに告げて俺は回れ右をして全速力で走り出す。彼女の後ろには・・・おばさんが立っていたのだ。最後に確認できたのはにたりと笑うおばさんの顔であった。

「輝、私が言つたことを守るビームか・・・データしてんなんてねえ。」

俺はおばさんから逃げることができなかつた。無念だ・・・・。

未来予想図? 4（後書き）

え～これで・・・四人との心温まる？未来予想図が終わりました。皆さんの中ではどれが面白かつたでしょうか？教えてくれるとつてもうれしいのですが・・・。これからはとりあえず道場の話になっていくと思います。皆さん、これからもよろしくお願ひしますね。

一一一、

季節も移り変わるもので……いや、五月が季節が変わったといつのだろうか？まあ、なんにせよ俺の特に何もない学校生活は一ヶ月がたつた。転校してきたという設定の三人と本当に転校してきた幼馴染はいまや学校に完璧になじんでおり、俺の名前より知っている人物のほうが多い。ま、俺としてはこいつだと想つのだが……。

午前中の授業も終わり、弁当の時間と混合の昼休みがやつてきた。俺はその場で弁当を広げる。

「輝さん、今日は私がお弁当を作つてきたんですよ。ビーフ、食べてみてください。」

隣から離しかけてくる葵。俺の弁当箱から赤いはさみが飛び出していた。まだ動いているところをみると……いや、世の中に一ついいこと悪いことがあるからな。やめておこう。

「……いや、俺も弁当を盛つてきっこるからこよ。」

「輝、私の弁当食べてみてくれない？」

左隣から加奈が俺に小さな弁当箱をさしだしてくる。俺は一応受け取つて開けてみる。意外と中身はまともであった。だが、白いご飯と梅干以外に面積を有しているものはなかつた。

「…………加奈、今度一緒におかずの練習でもしよう。」

加奈の弁当を戻して俺は再び弁当をあけようとすると。しかし、次にやつてきたのは碧さんであった。

「輝君、私のお弁当を食べてみて。残さず食べてくれるとうれしいな。」

みどりさんの弁当は重箱4段で構成されている。いや、こんな量を一人で食べろなんて無理だろ？

「…………すいません、今日は、腹の調子が悪いみたいなんですが。」

俺は謹んで辞退させてもらい、今度こそ俺が作った自分の弁当を開けよととする。だが、まだまだ先はあった。

「アキ、私の弁当見てみてよ。」

穂乃香ちゃんはなにやら危険な香りのする弁当を持ってきた。

「…………いや、見るだけならいいけど……」

俺は覚悟を決めてみた。だが、俺の目にはモザイクがかけられて、よく見ることはできなかつた。多分、見ていたら失神していくに違いない。

「味はいけるよ？」

そんなことを言つ、穂乃香ちゃんを見て俺は思つた。これはうん

味のカレーとカレー味のうる、ビーフチャーがいがと聞かれるよつなものだと……。

「ここにいってはゆっくり弁当も食べる」とはできないと思つたので場所を変えることにした。他の面々はそれぞれ自分の弁当を食べ始めている。葵は、ぼりぼりと音を立てながら……加奈は物足りないといった表情で……碧さんは他の人より速いスピードで箸を動かしているし、穂乃香ちゃんにいたつては気絶している。

屋上の風は気持ちがいい。俺は一人、屋上で風を体で感じていた。ふ、自分によつてしまつぜ……さて、冗談はここまでとして俺は限りなく広がる空を見た。

心を整理したいとき、俺は青い空を見る。それは小さじろから習慣のよつなもので、俺は意外と気に入つてゐることもある。屋上に設置されているベンチみたいなものに俺は腰掛けて目を閉じた。

ひゅるるるるるる……

何かが飛んでくるよつな音がして、それがこつちに向かつてきたりを知つたのはかなり後のことである。つこどに言つならそれは俺に直撃したらしい。

「輝、お爺ちゃんは久しぶりに登場できて感動じや。いつくばつてもいい。」

「爺さん、死んでるんだろう……」

「全く、輝はつれなしのよ。面白ことを教えてやろうとしたの

「・・・」

「ふん、どうせ・・・また口ごどだらう?」

「いや、お前に必殺技を伝授しに来たのだ。」

爺さんの口は本氣だった。ここまで爺さんが本氣の口をしたのは・・・女湯を覗きこいくとおり、手鏡を使ってエスカレーターに乗るときぐらいだ。それ以外でこんな口をしたのは初めてじゃないか?

「お前さんが今習つてこるのはな、全ての声を聞く拳法じゃ。」

いや、ぶつちやけじつて何を言つてこのかわつぱりわからない。

「・・・・つまり?」

「その拳法の技を習得してこべ」と云つ、お前は変なものに会つ確率が上がつていぐ。」

「・・・・俺が・・葵達にあつたのもとの拳法のせいか?」

「こえすー。だらつらじや。次に必殺技じゃが・・・・

「倒す敵もライバルもいないのに必殺技か?」

「こちこちあむあむのよ。知つていて別に損はなかう?」

まあ、確かにそうだが・・・何か問題はないなら別にいいか。

「じゃあ、教えてくれ。せめて痴漢撃退ぐらいには使えるだらうか

「うな。」

「男が痴漢撃退するのもありえんじゃねえ。まあ、いいじゃねえ。まずは精神を統一するのじゃ。」

俺は言われたとおり、真っ暗な世界で田を閉じ、心を無にする。

「……心を真っ白に見るのじゃ。真っ白へ、真っ白へ。」

真っ白へ、真っ白へ

「真っ白へ、真っ白へ、純白へ、純白へ」

純白へ、純白へ、しりばんつうへ、

「純白、純白へ、しりばんへ、爺さんへ、ふれかぬのはよれでやつてくれないか？」

「ちええ・・・・」「冗談なのに・・・」

「」の後も俺は爺さんの妨害をくらしながらも、全身から力を取りを集中させることができた。

「では次に・・・基本の構えを取つた後に・・・全身から力を取り除き、体に緊張感を持たせる。」

爺さんがいつていふことはかなり怪しい。田だけは本当に真剣なのだが・・・手元においている本をちらちら見ながら行つてゐるからだ。大丈夫なのか？

「わい、これでここはすまじや。それではこぐわーー！」

爺さんはいきなり俺に襲い掛かつてた。いつものおわやらけ度は全く感じられない。その目はまるで獲物を狙う獣のようだ。それに、強さも全く見つていらないし、逆に強くなっている気がする。

「わいや、びしつた？」

「く・・・くわおーー！」

俺の拳はむなしく空を殴り、逆に俺の腹に爺さんの拳が突き刺さる。く、口じごこち。

爺さんの遺産（前編）（後書き）

「」から動き始める物語・・・とつあえず「」んな感じでしうりか？何がときかれた場合のみ答えをせてもうります。いや、ただ書くのがめんどいわけではないですよ？

一一一、

爺さんの行動には隙が多い。いつも見ている俺は間違っているようだ。この拳法の主体はどうからどう見てもカウンターで攻めに向いていないように見えるのだが・・・。とりあえず爺さんの隙を狙つて攻撃しようとするときその攻撃をつぶされた拳句にその部分に強烈な一撃を爺さんは打ち込んでくる。

「ほれ、どうした？ わしはまだ元気じやよ。」

「ぐうう・・・」のべへジジイめ。それーー！」

爺さんの体に掠りかかるになるのだが、あたらない。これではまとんど意味がない。

「ほれ、これで最後じゃ。」

「ぐはあーー！」

爺さんの拳から繰り出される決定的な一撃を俺は頭、胸・・・・

そして股間に食いついて倒れた。ぐ、爺さんめ・・・・いつかぜってえ、あなたの玉をつぶしてやる。ば。

「つむ、なかなかいい動きじゃったよ。後は実践で慣れねばやうのう

ち体がついてくる。さすれば・・・誰にもばれずに女湯を覗くことなど朝飯前よ。」

俺はそんな爺さんのたわごとを聞きながら気を失つたのであつた。

「・・・・・」
「・・・・・」

次に目を覚ましたのは・・・一度しか行つたことがない保健室であつた。二つあるうちのベッドのひとつに俺は寝てゐるようだつた。体がいたるどころ痛い・・・。特に爺さんに食らつた最後の一撃が・・・強力だつた。いや、マジで女になるがあの世にいくかの瀬戸際だつたぜ。

「・・・・少年、大丈夫か？」

「あ、はい。」

俺の田の前にやつてきたのはゞいひや、保健室の先生らしこ。身長
が高くて顔色は悪い。えむらかとこ、いづこかの研究所にいそくな
霧団氣を出している。

「君は屋上で気絶していたところをたまたま通りかかった生徒によつてここまで運び込まれたのだよ。どうやら頭に何かあたつたみたいなのだが・・・それがよくわからなくなつてしまつてね。」

「あ、もう大丈夫です。失礼しました。」

俺は急いで保健室を飛び出す。なぜ、急に飛び出したかといふと・・・あの保健室の先生の背中に・・・女の幽霊に違いないものが見えたからである。くわばらくわばく。たたられたらたまたまつたもの

ではない。保健室からある程度はなれたところで腰さんについた。

「輝君、ちゅうじよかった。今からひに行こうと思つてたのよ。み

「どうかしたんですか？」

「ええ、輝君には悪い知らせだけね・・・部活に今から一週間以内にはいらない生徒は放課後補修となつたのよ。」

「ええ！―まじですか！―

「とりあえずね、何か部活にはいるか、新しく部活を発足させないといけなくなつたの。私としては新しい部活を作ってくれるとうれしいんだけど・・・・どうかな？」

「ええ、俺はいいですよ。だけど部活つてどうやって作るんですか？」

「私がやつておくから大丈夫よ。それじゃ、明日の放課後は第一生物室まで来てね。」

第一生物室？そんな教室がこの学校にあつたのだろうか・・・。俺は不安に思いながらも・・・すでに放課後になつて人気がない教室までかばんを取りに戻つたのであつた。さつさと家に帰つて体を休めよう。だが、人生そういうからしく、教室には人が一人俺を待つていた。いや、女子が俺のために残つていたらうれしいのだが待つっていたのは見知らぬ男であつた。

「やあ、君が白川 輝くんかい？」

「さうだけど？あなたは誰？」

俺は見知らぬ人物にあまり名乗りたくない。今まで見知らぬ人たちに名乗ってきていいことはなかつたからだ。それはさておき、このきざつたらしい男は誰だ？こんな男は俺の脳内に記録されていないうつだ。

「ふ、僕の名前は黒河 暗^{くろがわ あん}。」

「うわ、すっげえ・・・嘘くせえ。俺の名前に対抗でもしてるのか？みれば見るほど俺よりかっこいいから腹たつわあ・・・ま、こんなやつの相手をしてないで帰ろりつ・・・

「じゃ、黒河・・・俺は用事があるから先に帰るな。」

「ああ、気をつけて帰りたまえ・・・いや、ちよつと待った。」

俺のかばんを引っ張つて俺の動きを邪魔する黒河。はあ、近頃本当に変な連中に会うな。

「・・・で、あんたは俺に何かようか？」

「ああ、君ほど鈍くて鈍感な男がいるなんて嘘だろうよ。僕みたいなクールな男が気味みたいな熱血少年を教室で待っているときのこの後の展開がわかるだろ？」

ま、まさか・・・

「すまんが黒河とやら、俺は男に興味はない。」

「君は馬鹿か？ライバル宣言をするだろ？！…」

クールボーリーは顔を真っ赤にして否定してくれた。ああ、よかつた。

「で、そのライバルとやらは俺になんてそんな宣言をする？俺が知つていい宣言はポツダム宣言だけだが？」

「そりだな、仮に『影でモテル男ナンバーワンを取られた男の挑戦宣言』とはどうだ？」「

はあ、やっぱこの高校を選んだのは間違いだったのかも知れない。

「…………別にいいが……長すぎるから『KNT』でどうだ？」

「つむ、ビートなく無理やりでまつたく美しくない気がするがしうがない。いいだろ？。」

「うわあ、ここつとぜってえ、友達になりたくねえ。俺はこの変な知り合いができるだけ登場しないように祈りながらその『KNT』をした相手から逃げるようになに学校を飛び出した。

校門のところには葵、加奈、碧やん、穂乃香ひやんが立っていた。どうやら俺を待っていてくれたようだ。

「輝さん、遅いですよ。」

「すまん、いろいろあつたらから遅くなつたんだよ。」

別に待ち合っていたわけではないが……待つてくれたの

でお礼だけはいっておひげ。

「みんな、まつててありがとな。」

「いいですよ。」

「わうだよ。」

「そうですね。」

「ま、当然だよ。」

俺と四人？（いや、四匹か？）は夕日を背に家に向かって歩き出した。俺は思う・・・こうして日々が續けばいいと・・・だが、股間を蹴られるのだけはその日々に入れないのでほしい、いまだに痛いから・・・。

初めて貰った・・・手紙

一三三、

ライバル宣言を受けた次の日の朝、俺はこれまで生きてきた中で初めての経験をした。やり方が古風だと思うが、俺の下駄箱の中にピンク色の便箋が入っていたのだ。その便箋には達筆な字でこう書かれていた。

『放課後、校舎裏で待ってます。A、K』

その手紙の中を読んでから俺は教室で飛び上がったね。だが、今日の放課後はすでに予定がはいつている。そう、昨日碧乃香さんと約束した場所に行かないといけないのだ。

「うーん、困った。」

「白川、うん×をこの場で出したのか？」

そんな下品な内容で俺に近づいてきたのは言わなくともわかるだろ？が、中学からの友達だ。仮に男子Aでいいだろう。

「・・・いや、実は生まれて初めてラブレターとやらをもらひたんだが？」

「突っ込みはないのか？まあ、別にいいけど・・・。そうか、白川には春がやつと来たのか？だけお前には葵さんと加奈ちゃんがいるじゃないか？更に言うなら穂乃香ちゃんもいるだろ？うわさも混ぜるなら碧先生とも関係があるそうじゃないか？もしかしてこの

中の誰かがお前宛に送ったものじゃないか？」

「うーん、俺にそんな嬉しそうな事をしてくれるのは一人でもいるだろうか？葵か？いや、葵の奴は俺にザリガニの世話を近頃毎日させてるからな。

却下したら俺を涙目で見やがったからなあ。

じゃ、加奈か？いや・・・これもないかもしれない。

すぐ何かあつたら俺をサンドバックのように扱いやがるからな。いや、碧さんかなあ？・・・違うな。この前なんか昼寝していた俺の頭を思いつきり噛み付いたからな。最後の穂乃香ちゃんにいたつては論外だ。あの人が手紙なんて可愛らしいまねをするわけがない。するとしても矢に果たし状みたいにして窓から打ち込んでくるに違いない。

「白川、四人の容疑者の中に心当たりはいたか？」

「いや、どいつもこにいつのこの件だけでは白のようだ。普段は俺をぼこぼこにしたりこき使ったりしているがな。」

特に加奈は傷害罪で牢屋に入れられるべきだ。雷なんてまとめて抱きついてくんなや！！

「・・・じゃ、誰かのいたずらじゃないか？」

「はっきり言うがまだこの高校の連中で知っているやつらは多いが仲がよい人物は数える程度だ。恨みを買われることなどほとんどないぞ。」

俺と男子Aは考え込んだ。だが、とある女子が俺たちに話しかけてきて・・・正確に言うと俺にではない。

「…………くん、ちょっと来てよ。」

「うん、わかったよ、いとしのマイハイー！それでは白川、がんばつてくれよ。」

「うしてたつた一人の相棒は無慈悲にも俺の前から姿を消した。さて、一人になつたけどどうしたもんかねえ。もしかしたら間違いかもしれないから無視しておこうかな。」

「輝さん、きちんとザリガニさんたちに餌をやつてくれましたか？」

「ああ、きちんとするめをやつておいたぞ。」

葵が登校してきたんで俺はいつたん思考を停止することにした。青いがもしも俺宛のラブレターを見たらきっと俺を笑いものにするだろう。

「輝さん、手に持っているそれ、ラブレターですよね？」

いやははや、竜だと直感でも鋭いのかね？一発で手紙がばれてしまつた。

「…………ああ、そうだがどうかしたのか？」

「世の中には世捨て人がいるんですね？輝さんなんかを選ぶ人がいるなんて世も末ですよ。」

うわ、ひでえことを言いやがる。何だつて俺がそんなことを言われないといけないんだ？まだ葵たちにはあの本はばれてないはずな

のに・・・。

「あいつとそれは誰かの悪ふざけですよ。」

「・・・・だつてよお、このイニーシャルに知り合へはいんだけ?
?」

「ほら、この高校で新しく知り合つた人かもしれないですよ?」

新しくできた相棒は薄情な昔の相棒よりも頭が切れるようだ。

「新しく出来たともだちねえ・・・・いや、いないと思ひつけど?」

「本当ですか?ほら、忘れない人のことも思い出してくださいよ。」

忘れないやつ?そんな奴いたつけ・・・・!?

「思い出した!!機能の放課後にそんなイニーシャルのやつと話をしたこともあつたけ?」

「昨日のことをそんなに早く忘れないでくださいよ。輝さんの頭はデコレーション前のケーキですか!」

「ぐ、失礼なことを言つんじやない!――まあ、葵のおかげで無駄な時間を省くことが出来たよ。つーか、危うくだまさるどいつもだつたぜ。」

よかつたよかつた。あんなやつのわなに引っかかりそうになるなんてかなり浮かれてたぜ。もうちよつとで俺は奴の笑いだねになるところだった。

「あ、セツコえぱ・・・・・・・今日は放課後第一生物室に皆集まるのよつに鶴さんが言つてましたが・・・・輝さんもですか？」

「ああ、俺も呼ばれているけど葵もか？」

「どうやら俺以外にもいろいろ鶴さんは呼んだようだな。あの天然なお姉さんが誰をよんだか注意が必要だ。ライオンやトト、はたまた想像上の自分の仲間を呼んでくる可能性だつてある。

「輝さん、何そんなんに固くなつてているんですか？」

「葵、氣を引き締めないとやられるぞー！」

葵は俺の顔を見て不思議そうな顔になつた。今頃思い出したがこいつも人間ではなかつたんだな。忘れていた・・・・てつきりザリガ一の化身かと思つてたぜ。

そして放課後、俺と葵、加奈と穂乃香で第一生物室に向かつた。葵が言つたことは正しく、昼休みになつて俺のもとに一度と登場してほしくなかつた俺の中の使い捨てキャラがそのかつといい顔で俺のもとに飛やつたらしくやつてきた。

「ふ、どうせやられてしまつたよつだね。」

「ああ、危つてだまされたといひだつたが、葵のおかげで助かつたぜ。」

「わうか、葵クンとやら・・・・・どうかな、僕の彼女になつてくれな

いか?「

な・・・いきなり初対面でなんてことを言つんだー!

「輝さんと回じておいがするから嫌です。」

俺はショックを受けた。いや、被害者は俺だけではない・・・
そういうわれた暗も石像となり、俺は加奈により立ち直つたが、暗の
奴は気がついたら俺の教室からいなくなっていた。葵は何故か怒つ
ており、まるで怒り狂つた龍神のようだ。いや、洒落になつてない
な・・・。

「輝さんは私たちに隠し事をしてゐるから嫌いです。」

「ちよ、何のことだよ?」

第一生物室に向かう廊下で葵は俺にこういった。身に覚えのない
ことなので俺は戸惑つた。

「机の裏に隠してある本のことですよーー。」

そういうわれて俺の頭の中は真っ白となつた。ぐ・・・ばれたか・・
・・。

ああ、謎の部活発足？

一十四、

俺の近くにいた人外の者たちは俺の敵となつた。左右から腕をつかまれ、葵は珍しく俺をにらみつけている。そして俺は脂汗を顔に出しきつっていた。

「……最後に言い残したことはありますか？」

「……別にいいじゃん……いや……嘘です嘘……」

葵は近くにあった掃除道具の中からモップをもってきて俺に狙いを定める。

その狙いはじやり俺の額のようだ。

・・・・とある人物は手足を狙うなどをして相手を傷つけないようにするそつだ。だが、ある日それを逆手に取られて寒い海に沈んでしまつた。死んでなかつたのが不幸中の幸いだ。いや、そんなことより今の俺の身の安全は誰がしてくれるのだろうか？よし、よし、俺の腕をつかんでいるどちらかを買収しよう。まじめな穂乃香ちゃんでは駄目だらうからまずは加奈からだ。

「か、加奈ちゃん……おひこと聞いてあげるからこれをとめてくれないかな？」

「うーん？ 私を呼ぶときはいつも呼び捨てなの」「うとうときだけちゃん付けするんだ？ いいじ身分よね。」

あわわわ……最後の頼みの綱も切れてしまつた。ああ、爺さん・

・・・あなたの孫はあなたと同じところに行こうとしています。こんな世の中なんて仕分けしてリサイクルに出すべきだ。

「・・・葵さん、どうやら輝も反省しているようなので許してあげたらどうじよつか?」

「やいや、どうやら世の中まだまだリサイクルするべきではないようだ。」みの中に使えるものがいるようだ。いや、きっと枯れてしまつた花とドライフラワーを間違えたに違いない。

「・・・本当に反省してるんですか?」

大体、何で俺は怒られているんだ?まさかばれるとは思っていないかったのだが・・・どうしたもんだろうか?もしかして葵の夢に爺さんでも出てきて隠し場所を告げたとか?

「はい、これから先はばれないように・・・いえ、一度とそんな不純な本は買わないよにします。」

「はい、約束ですかね?もしも破つたらその命、私がレンタルしますから・・・そのつもりでいてくださいね。」

「うして、俺は釈放されたのであった。ああ、加奈がいてくれたおかげで助かつたぜ。もし、加奈がいなかつたら今頃爺さんと話しあっていたに違いない。

「・・・葵さん、遅かつたですね?」

ようやく第一生物室についた。着いたのはいいのだが・・・こんな地下室の実験室みたいなところでどんな部活をするんだ?まあ、

あつと文化部なのは間違いないだらけ。

「……鶴先生、いつたここの部屋でどんなことをするんですか？」

穂乃香ちゃんがそのように尋ねる。やうやくやうだらけ。何をするか決まってないならそれは部活動じゃないだらけ。

「……ふふふ、じつはですね、この学校の歴史を探ついたらかなり前に廃部となつたとある部活があるんですよ。その部活の名前は『秘鑰部』。」

ひやくぶ？ ちなみに秘鑰といつのは秘密を明らかにする方法、手段などである。

「……で、名前はわかりましたがどんなことをするのですか？」

「そのままです。秘密となつていてることを私たちの手で明らかにするのです。」

そう意氣込んで力強く宣言する鶴さんの姿はどこかの軍のお偉いさんのようになつた。たしか、ジメンだったかな？ ああ、ちょうど色もあつてるのはちょっといいな。

「……秘密を明らかにするって具体的にどうするんですか？」

「簡単ですよ、穂乃香ちゃん。たとえば、加奈ちゃんのスリーサイズや輝君が隠している本の数、青いチャンがしとめてきたザリガニの数などそんなどうでもいいことから、人ではない竜の生態などです。それに、椎名さんから聞きました輝君が使っている謎の拳法な

「…のすべてを明らかにするのです。」

「うん、前半はどうでもいいね。一つ目は期待したら裏切られそうだし、二つ目は絶対に秘密にしていたい。最後のはもはや数えるのも無意味だ。近頃、ザリガニを近辺の川で見ることがなくなつてしまつたからな。もしかしたらこの地域のザリガニはすべて絶滅しているかもしね。」

「…、碧さん、俺から提案があるんですけど？」

「はい、どうぞ、輝君。」

「とりあえず何かのテーマを決めませんか？ほら、用で変えるとかどうでしゅう？」

「ああ、いいですね！…それでいきましょうか？」

「うして、かなり適当に方針は決まった。その後もいろいろと話し合った結果、次のような役職が出来上がる。顧問 碧 部長 穂乃香 第一副部長 僕 第二副部長 加奈 裏の部長 葵 なんだかよくわからないのも混じっているかもしね。そこは愛嬌だ。勘弁してほしい。そして、最後に今月の目標を皆で決めることとなつた。これにもなかなか時間がかかる。とりあえず、顧問の意見を聞いてみることにした。

「…、まずは輝君の頭を解剖してみましょうか？」

「いや、戻せるならいいですけど…、誰もいないでしょーーー。」

「じゃあ、とりあえず加奈ちゃんあたりを三角のこすに座らせて反

応を見るとか?」

「そんなことしたら警察に捕まります……第一、あなたは変態ですか?」

「じゃあ、葵ひやとのザリガニをすべて戻してあげるのね?」
「かじり?」

「ここ考えですか? すでに生きてこむザリガニは家にいません。
生きてこるとしたら葵のお腹の中です。」

「じゃ、穂乃香ちやんと輝君を本気で戦わせるのせ?」

「それじゃ、部活ではなく、ただの決闘です。」

れつきから俺と離れるしか喋つていない。他の部員たちは蚊帳の
外だ。

「……じゃあ、この町には数えるのが面倒なくらい道場がある
から、なぜそんなにあるか調べるのは? 深い秘密があるかもよ
?」

「まあ、それはいいですよ。」

しかし、それはただ単にあるだけではないのだらつか?

「皆、今円の田標はこの町の道場の秘密よ……明日からこころ調
べてもうつからぬの氣でいてね。今日の部活はここまで。」

一方的に本田の部活は終了した。ある程度決まったからいいだろ

うが、これがどうなるのだろうか……。まさかとは思つが、
鶴さんせこの町について何か調べているのではないだろうか……。
。わざとおばさんにいろいろやられたに違ひない。

「……アキ、顔色悪いけどどうしたの？」

「いや……ちよつと考え事してただけだ。」

「？な？いこけど……」

俺たちは来た道を再び四人で歩き出した。なぜだか思つ……。
俺は誰かの手のひらの上で踊つてゐるだけではないのかと……。
つまり、俺の隣にいる竜たちと出会つるのは仕組まれたことではない
のかと……。いや、考えすぎだ。これはサスペンスでもなんでも
ない、ただの学校生活のはずだ。うん、そうに違ひない。

「輝さん、考え方ならこれ飲めばいいですよ。」

心の中から心配そうな顔をして、葵は俺の手にひとつビンを渡
してくれた。だが、それには蛇が入つてゐるのであつた……。
はあ、不安だ……いろいろと。

ああ、謎の部活発足？（後書き）

そこしんするのが遅くなりました。すいません。

ああ、俺はもう・・・天にも昇る気持ちだ。

二
三
五、

・・・・輝、おまえの・・・・を・・・ナガハシ・・・

「…………うわああーーはあはあ…………」

俺は田を覚ました。部活が発足して次の田の朝に・・・。どうやら嫌な夢を見ていたらしい。だが、その中身は思い出しき出 来ない。

外はまだ暗く起きるには早かったのでとりあえず寝ることにした。それにしても嫌な感じだ。

そして朝、眠たいので布団を抱き枕のように扱う。今日の布団は前日干してもいいのにやわらかかつた。うへん、もつといひしていた・・・

卷之三

いやいやいやいや・・・俺が抱いていたのは布団じゃねえ！！加奈だ！！加奈を抱きしめてるじゃねえか！！

「あわわわあわあわわわわ・・・」

俺の目は完全に覚醒。なんだかこの勢いならお化けだつて見えてしまいそうなくらい、田がさえている。いや、ほんとになんで加奈がいるんだ? あ、ちよづじいいや。田を覚ました。

「…………か、かなあ……な、何で俺の布団に入つてんだ?」

「…………あれ、おかしいな?トイレの帰りにちやんと部屋に戻つたと思つたんだけど?それに、どうせやうりトイレを間違えたのは私だけじゃないみたいだよ?」

そういうて加奈は俺の右側……を指差す。

「す、す、す、す。」

「…………。」

そこには葵と體さんが静かに寝息を立てていた。い、いつの間に!

「ど、どうなつてんだ?」

俺は、布団から飛び出るきつと一糸まとつていらないだろつ、竜たちの肩を見る。いや、何も布団をはがして服の有無を確認するわけではありません。ここからでもきつと服を着ていのいのはわかります。

「…………加奈、とりあえず俺は下に行くから他の一人が起きたら服を着せてから降りてきてくれよ?」

「え、うん。わかつたよ。」

布団がはがれないように気をつけながら俺は布団から這い出る。こんなところをおばさんに発見されたあかつきにはきつと吊るされた後に皮をはがされるに違ひない。ああ、考えるだけで背筋が……

・つて……

「なんで、何で穂乃香ちゃんまでいるんだあ……。」

加奈の隣には俺の幼馴染が寝ていた。いや、すこいな……とかこんなに大人数がはいつているのにどれだけでかいんだ、俺の布団……。

「まあ、何事もなかつたよくなのでよしこよひ。さて、おばさんにばれなによつにじないと……。」

「くえ、誰にばれなによつにじよつだつて?」

俺の体が固まる。かちん!かちん!に……勇氣を出してその声がしたほつを見る……と、そこは窓であつた。知つていてると思うが!これは一階だ。なぜ、おばさんの顔が窓に向ひはあるのだ?

「輝、ハーレムにでも田覚めたか?」

「いえ、滅相も!やひこません!……気がついたらこのよくな状況に追い込まれてあり、自分としてもなぜこうなつているのかさっぱり見当がつきません!……うれしいかと聞かれたら首が折れるまでふれる自信は一応、あります!……」

「そつか、じゃあ、話があるからわかつておきな。」

ああ、この調子で行つたら俺は死刑確定か?最後に天国のよくな光景を心に刻んでおくべきだらうか?つへん、これは困つた。

とりあえず、少しだけ悩んですぐに下に行くことにした。ま、なんとかなるだ。いや、なつてもらわないと俺の命は風前の灯。

下に降りた俺を待つていたおばさんは台所に立っていた。その手には良く切れるだらう、包丁が怪しく輝いている。ああ、おばさんはぶつ切りが好みですか？それともミンチがお好みでしょつか？

「……さて、輝、これからお前にまごひきやつてももらいたいことがある。」

「はー！向でもおひしゃつてくだせー！」

「！」の地域にある道場をすべて潰せ……」

「はー！」了解いたしました……出来ればその理由も教えてくれると非常にうれしいのですが？」

「これはふざけているのではない。生き残りうと俺も必死なのだ。そう、これは命令を上級兵士が下級兵士につげるようなものだ。もし、却下されたら俺はどうなるのだろう？」

「……とりあえず、お前が使つてこる拳法のことを三分で知るチャンスをやつてこないと想え。」

「は、質問に答えていただき、天にも昇る気持ちです。」

「わづか、それじゃ、天に送つてやるつか？」

「結構ですー！」

そういうって俺はその場から逃げ出した。とりあえず、比較的安全

だらり、トイレに逃げ込む。

「……俺の使っている拳法を知るチャンスか……」

そういうて俺はため息をつく。結局、知るために自分で調べないといけないのであるが、それにあのおばさんのことだからパンダの箱を開けるよりも大変なことがあるのかもしれない。でもまあ、もしかしたら葵たちのことを詳しく知ることが出来るかもしないのでがんばってみよう。

「……輝さん、早く出てください。」「

「あ、すまん……」

やつてきた葵がトイレの前で声を出す。そして、俺はトイレを出る。そしてまた、俺の身に信じられないことが起きた。

なんと、葵が俺の胸に飛び込んできたのだ。

「……輝さん、どこにも行っちゃ嫌ですよ?もしも私たちをおいていたら覚悟してくださいね。」「

「あ、ああ?よくわからんがわかつた。肝に銘じておくよ。」「

そういうことと葵は俺から離れた。その顔には笑顔が広がっていた。

「……約束するから、田をつぶしてください。」「

言われたとおりに田をつぶると、唇に何かあたった感触を覚えた。田を開けると、そこには葵の顔が広がっているだけであった。……

・・・あはははは・・・いや、はずかしいねえ。
そして、俺は学校に遅刻したのであった。

ああ、俺はもう・・・天にも昇る気持ちだ。（後書き）

遅くなつてすいません。ちょっといろいろ事情がありまして・・・
・というより、今に始まつたことではないですが大量の誤字を発見
し、修正していました。

ああ、なんかなのだろうか？

一十六、

まあ、とてもしつれしにようなことがおきたその日の部活。その日は加奈と一緒に近くにある道場に向かつこととなり、一人でその道場に向かつ道を歩いていた。

「加奈、何で今日は皆俺の部屋にいたんだ？」

「…………はは、恥ずかしいけどね、多分、皆輝の夢を見たんじゃないかな？」

「お、俺の夢を見たのか？そりやもつ、夢の中では夢を見てる本人の好きなように出来るらしいけど…………ひ、つまりそれは…………」

「ど、どつあえずどんな夢だつたんだ？」

俺はあせらる気持ちを沈めて加奈に聞いた。

「…………輝がね、誰かに負ける夢で……そうだね、私の記憶しているのは輝がぼろ雑巾のように転がってたんだよ。」

ひ、ひでええ！！あんまりだろ、それは…………

「そこで夢はおしまい。私は心配になつてどつあえず輝のところに行つたんだよ。」

そ、そなのか…………はあ、まあ…………皆俺のことを中心し

てくれていたのは嬉しいな。

「加奈、心配してくれてありがとな。」

「ふふ、いいわよ。」

全く、まるでお姉さんみたいだな。さて、そうなると他の竜たちも俺が散々に負けて使い古された雑巾のようになつた夢を見たのか？そしてもう一つ、それは俺が見た夢と関係しているのかもしれない……なんだか、波乱の幕開けのようだ。

「あ、ここだよ。」

「…………」は錢湯だらうへ。

「いや、まちがってないわよ。ほら、このほうに奥のトイレより右のほうに錢湯拳をおしえて書いてますって書いてるじゃない？」

加奈が顧問から渡された紙を見ながら俺に言ひ。いや、本当にこの土地は凄いね。これはどうからどう見ても風呂屋だらうへ。それに錢湯拳って何だよ？

「ま、わざと看板を持つて帰ろうよ。それが無理だとしても話がらい聞けると思うからね。」

そういうて加奈は一人で錢湯の中に入つていぐ。俺もとりあえずその後に続くことにして、再び、錢湯を見るがどうからどう見ても錢湯だ。

だが、番頭さんに案内されて初めて気がついたが、なんだか殺氣

立ったものを感じた気がなつた。

「……………」

そうして、俺と加奈は銭湯の中に道場の中に案内された。そこには、ありえない相手が正座をして精神を集中していた。

「ば、ばあちゃんー！」

「……………」

そう、そこに座っていたのは俺の親父側の母親であった。爺さんも親父側なのである爺さんの妻にあたる。最後に見たのは……俺が今住んでいる家に来たときだな。そのときはばあちゃんと來たんだが、ばあちゃんはすぐにいなくなつたんだよ。行方不明だつたと思つたんだが？

「輝よ、近頃お前の夢にあのスケベジジイは出てきたか？」

「え？ う、うん……近頃は良く出でるけど？」

「さうか、今度あのスケベジジイの墓をもう一度破壊しておこうかの？ ま、それはいいとして輝の隣にいる可愛いお嬢さんは童だらう？」

「……わかるの？」

さつきりこつておぐが、ばあちゃんはあの爺さんより数倍は強い。新型エンジンを積んだガンダ 並だろ？ まあ、そんなばあちゃんは爺さん意外には優しいのだ。

「…………ふうむ。お前もよつやくあの意味のわからない拳法が少しほ使えるよつになつたよつじやな。まあ、とつあえずどれだけ強くなつたか見せてもらおうかの?」

そういうわれて俺は白旗揚げて土下座して謝りたくなつた。まあ、昔の話だが・・・一度爺さんがちよづ家にいなかつたとき、爺さんの代わりにばあちやんが手合わせしてくれたのだが、その結果として俺は一ヶ月ぐらい入院していたらしい・・・俺はばあちやんと向かい合つたところまでは覚えていいのだが、それ以降の記憶を忘れている。

「・・・・輝よ、男といつのはな、碎け散つてこそ華なのだ。つまり、玉碎覚悟の気持ちを持つて何事にも挑むべきなのだ。」

「・・・・はい、わかりました・・・・」

俺は銭湯の中にある道場にて、この前も勝つことが出来なかつた爺さんより数倍強い敵を相手に正直ビビッている。簡単に想像するなら、雨の中、不安と恐怖に震えている子犬みたいなものだ。とても優しい飼い主が現れるならいが、今俺の前にいるであろう、ばあちやんの場合の優しさはよけつと違つ。武士の情け・・・つまり、これ以上苦じむことがないよつに震えている子犬をしとめようとすのだ!!

「ほり、仕掛けでこないなうひちからこいつかの?」

「そうこつと、あつ……とこつ間にばあちやんが田の前にいた。速い、速いよ!」

そして、俺の体もそのスピードで後ろのほうに吹つ飛ぶ。建物の

中には限りがあるので壁に激突。俺は思いつきり背中を強打し、少しの間呼吸をすることが出来なくなつた。・・・・手加減して多分このレベルだらうな・・・・・遠くから加奈が驚いてあげている声が聞こえる。

「輝、何かあのスケベジジイから教えてもらつてないのかい？」

「？いや・・・・ビッグだつたかな・・・」

「わうか、じゃ、こっぺん会つてきなされ。」

ばあさんは先ほどと変わつた呼吸法をした後、冷徹なオーラでもまとつてこるのかとてつもなく怖い顔となつた。

「・・・・・今から輝に打ち込む技はな、死者に会つに行くといふものじや。」

「・・・・・つまり、俺の息の根を止めよつとこつことですか？」

ばあちゃんはぞつとするような微笑を浮かべて・・・・何も言わなかつた。そして、俺が瞬きしたら俺の視界から消えており、気がついたときには寝に入り込まれていた。

「・・・・・『阿野世遺棄』――」

「・・・・・輝、生きとるか？」

「・・・・・いや、爺さんで会つたとこつじとまぢやら死んでるよ

うだ。ところよつ、殺されてしまつた。「

「まあ、あれじや・・・・元氣を出せ、これからお前こいいろいろ教えてやるからな・・・あのにつくべきへばあを倒してくるんじやぞ?いいか、絶対に息の根を止めるなよ?もしも息の根を止めたら間違いなく、わしの命はなこ。」

「・・・いや、爺さんはもう死んでるだらうへ、もう殺されるわなこと思つただが?」

「甘じや、あの婆は人間ではなく、竜なのじや・・・・。」

「ひ、ひやあーー。」

「嘘ではない、わしも生きていた頃はまだまだ青」「オジヤつたな・・・・若さゆえにあんな凶暴な竜を娶つたのだからな。今覚えба、過去に戻つて人生をやり直したいものじや。ドラ もへん!…たすけてええーー。」

「まあ・・・爺さん、とつあえず俺に向か教えてくれないか?そのために俺は死んだみたいだからな。」

「・・・・上し、それではこつちにうきててくれたまえ。」

ああ、これがかりゆいなのだらうか？

一十七、

「爺さん、どうに行くんだ？」

「……とまあず、この前のは冗談だったとして、モウチヨイ
お前を鍛える。」

それから爺さんは何も喋ることなく、目的地までもくもくと歩いていった。ずっと真っ暗なところを歩いていたが、ある意程度まで歩いていくと、その暗闇もなくなり、神社のよつなどこに着いた。

「爺さん、じるせんじだ？」

「じるか？ じるはな……いわば修行をする場所じゃ。ほれ、あの巫女さんを見てみる。あんな小物こゝも修行をしてこるものじゃ。」

指差すほうには赤いはかまを着た女の子が竹篠で境内を掃除している。一看すると、何事もないよう見えてる。爺さんが女の子に近づくと、女の子はひつちを見て、爺さんに頭を下げた。

「……菜々美たん、今日もええけつしてるので？」

「気持け悪いです……せつやあ……」

そういうと、持っていた竹篠を爺さんに向かって振り落とす。だが、さすが爺さんというべきだろつか？ それをあつたりと避けて俺の元まで帰ってきた。むなしく空を切った竹篠はそのまま地面に着弾・・・・その部分がめり込んだ？

「つむ、まだまだひよつじじゃな。」

「爺さん、竹簾が何で地面にめり込むんだ？」

「……ああ、気にするでない。お前に関係ないからな。それに、菜々美たんはわしのものじや。貴様にはやらん。」

そうこいつて俺はその名波とこつ少女がこいるまつとまつよつと違うところに俺を連れて行つた。そこには何もなく、あるのは爺さんの形をした大きな像だけである。

「どひじや、輝……すばらしこだろひ? 細部に渡るまでわしに似せて作らせてある。そつ、いわばこれはわしの生をじじや。だがな、これを怒らしたら怖いぞ?」

「……で、それはいじとして俺は何をしなことけないんだ?」

「つれないのあ、ま・・・いいか。とりあえずそここに座つて精神を集中しろ。雑念があれば、問答無用で……」

爺さんは指を鳴らすと、菜々美といつ女の子が・・・・・ヒヂとげしたものをおバットに打ち込んだ多分特別仕様の奴を持つてやつてきた。

「……菜々美たんのお仕置きが貴様を貫くだろ? ……」

菜々美といつ女の子の子はそのまま爺さんに向かつて持つていたものをぶつける

「…………やつ、いんなふうにな……」

爺さんはその場に倒れ、残つたのは爺さんを倒した女の子と俺だけである。

「…………れて、集中、集中……」

俺は倒れた爺さんを見なかつたことにして座禅を組んで頭の中を真つ白にさせた。

「じす、じす、ぱきぱきーべしゃああーー！」

後ろではきっと見たら王ザイクがかかるような光景が広がつているに違ひない。やつ、あの菜々美と眞つ女の子がきっと倒れている爺さんに鉄槌を下しているのだ。そして、もしも俺が少しでも動いたら・・・・・きっと爺さんのようになるに違ひない。それだけは避けたいものだ。

だが、どうやらその少女が叩いているのは爺さんではなかつたようだ。その証拠に今、

「…………輝、ほれ、真つ白のパンツじやよへじやうじや？」

やう、俺の周りをうらうらしてくるのだ。そして、眼を開けていないのでわからぬがきっとその手に持つていてのを俺の目の前でひらひらさせていいに違ひない。く、むかつく！――

なら・・・・・あの少女は何を相手にあんな恐ろしい音を立てているのだろうか？途端、俺の心に好奇心が湧き上がり、確かめたくなつた。しかし、爺さんがうらうらしている状態ではそれも難しい。つまり、結局のところは爺さんがやめとこつまで後ろの光景を見ることが出来ないようだ。

それから少しの時間が経つた。

その間も爺さんはいろいろと俺に試してみたらしく、爺さんがあきらめて俺に終わりを告げたのだ。あたりにはいろいろなものが散乱している。・・・・・記念に持つて帰ろうかな？いや、もって帰った場合は・・・・・再びこっちに送り返されるかも知れん・・・・・そのときは葵たちの手によつて葬られることだらう。

後ろの音はほとんどしなくなつており、時折聞こえてくる音は

ひゅー・どがん！－はあはあはあ・・・

といつた誰かが誰かの攻撃を避けるよつた感じの音であつた。それに荒い息遣いの音も聞こえてくる。

「・・・・輝、第一ステップじや。菜々美たんより先にあの黒龍を倒してこ。」

なんと、あの爺さんの像の一部が竜になつてゐるではないか！－いや、微妙にあれは下ねただ！－

「・・・・爺さん、あのふざけた竜はなんだ？」

「・・・・・この主じじゃ。暴れぐるつていた奴をわしが封印してな、征服した証としてあのよつた形となつた。名前はさつきも言つたが黒龍といつてな・・・・・いやあ、なかなかのじやじや馬じやつた。輝、がんばれよ。」

爺さんはそうこうと、あたりに散らばっているものの中から工口本を探し当てると言ひ出した。「これ以上、俺と話していくても面白くないと思つたのだろうか？まあ、今はそんなことより、あのお下品な龍をしとめるのが先だろう。俺がその龍の近くに行くと、後ろから爺さんが何か言つてきた。

「……輝、お前に前教えた呪文はな、人外のものから力を奪い取るものじや。それによつて、力がある程度まで抑えられた龍は他のものに形を変える。そうじやな、友達が欲しいとおもえれば、その種族と同等の形になる。まあ、そんなことより、力を奪えばその力を使えるわけじや。しかし、使い方はお前ががんばつて見つけるよ。最後に……黒龍が菜々美たんに倒された場合、お前の負けとなり、今度は輝が彼女の下僕となるから気をつけろよ。」

「え……それって意外と重要なことじやない？そんな……鼻くそほじりながら言わないでくれよ……！」

俺はあわててすでに戦闘が始まつてかなりの時間が経つているだろ？！これが予想される戦場に飛び込んだ。戦況はどうやら、下ねた竜のほうが優勢のようだ。彼女が持つていた武器はすでになく……

・一応、あるのだが爺さんの像の顔部分に思いつき突き刺さつていた。

「…………はあ…………はあ…………はあ…………」

片ひざついた菜々美に黒龍がほえると、かまいたちでも発生したのだろうか？菜々美の服がどこかびくり切れた。

「おおっ……絶景じや……」

後ろで爺さんがほえている。とりあえず俺は負傷している彼女のところまで走つていき、黒龍から遠ざけた。まだ、抵抗する気があるのか菜々美は俺に抱きかかえられたときに俺の股間をけりやがった。くううううう！－いてええええ－！

「胸触らないでよ！…変態爺の孫！」

「・・・・ううう、いてええよ。というより、爺さんと俺と一緒にするな！－そんなペタンコな胸なんて俺の眼中に入つてねえよ－！」

俺はそのまま竜の攻撃範囲からおよそ離れている場所に菜々美をおき、寄ってきた爺さんを気絶させると一人で黒龍のもとに走つていった。黒龍は暴れたいのか近づいてきた俺に攻撃を始める。

「しゃあつああああーー！」

その動作がかなりゆっくりに見えたような気がしたので避けてみると、あっさりと黒龍の攻撃を避けることに成功した。そして、黒光りする流れ弾は爺さんに直撃！

「……竜には何度殺された」とか……」「仕返しをした」と思つので俺は本氣で行くことにするぜーー！

ああ、終わりてしまった・・・（前書き）

「これで一応、終わりとなっていました。試しに書いていたものなので・
・・・これがどうなるかはわからないといふのです。今まで、応
援ありがとうございました。」

ああ、終わってしまった・・・

二十九

卷之三

俺はだんだん下ねた竜の近くに行くことができた。そして、なん
だかわからないが湧き上がってきたものを拳に重ねて・・・叩き
つける！！

ばつしゃーん！！

「ああまあーーー！」

竜に聞いたのかはわからないが、どうやら、痛がつてゐるようだ。
でも・・・今俺の手に水がついていたような?

「うむ、輝よ……それが極意なのじゃ。奪つた力を使いこなす……・
・それがこの拳法の真髓じや。しかし……まだまだじやな。」

いつの間に復活していったのだろうか？爺さんは俺の後ろに立つていた。

「ほれ、早くしないと黒龍が復活するわ? 心配はいらん、あの黒龍は寝起きが悪いだけじゃ。もう一度開つてもいいぞ。」

俺は遠慮なく、苦しんでいる竜に攻撃を再開した。しかし、不思議なもんだ。座禅組んでただけでこんなに強くなれるものなのどうか？う～む、謎だ。誰か教えてもらいたいものだ。

それから、よひりやく俺は黒龍を鎮めることに成功した。

「はあ・・・・・はあ・・・・・はあ・・・・・」

俺ももう限界だ。菜々美と回じよひて片膝をついたの場に寝転んだ。もうもう駄目だ。死にそうだ!!

「さて、輝よ。黒龍を見事倒したお前を復活させようと思ったのだが・・・・・ビリヤリ、無理のよひじや。」

「え・・・・・今何といいました? それもなんだかすごいことを言われたような気がするのですが?」

「・・・・・あまりに遅いお前の帰りにビリヤリばあが待つてくれなかつたようなのじや。結果、火葬されたのじやよ、お前の体はな・・・・・」

えええええ? か、火葬?

「つまり、俺は完璧に死んだことになつてゐるのか? まだぴちぴちなんだぞ?」

爺さんは耳を塞いでおり、どうやら俺の話を聞きたくないようだ。しかしお前・・・・火葬だつて? 「冗談じやない。」

「・・・・・まあ、どうちにしろ体がもう腐敗してたんじやないかのう、そんなときにお前の体にお前が戻つたら現代版のゾンビじやな。頭を撃たれて終わりじやな。」

「じゃ、なにか……俺はもう、どうすることも出来ないのか？」

「安心せい、あそこに女の方ならおるじやね? あの」で我慢せい。

「

爺さんはそうこうと、菜々美を連れてきて俺の田の前に置いた。菜々美は俺を見上げて云ふ。

「……爺さん、とつあえずどうかして俺は戻る」ことが出来ないのか?」

「あれ? スルー? ……そりやもつ、死んだ人間を生き返らせるのなんて無理じや。体が残っているならまだしも、カルシウムの塊となつていてるお前の体に何をしても無駄じやうつな。ま、犬の餌になるか学校の校庭に引くラインぐらにしか使い道がないと思うがの?」

さて、選ぶならどっちがいいかな……じゃない!!

「じゃ、なにか……やつぱつ俺はここで暮らさないといけないのか?」

頷く爺さん。そして、再び菜々美を押し出してきた。なんだ? 菜々美がなんかしてくれるのか?

「……ほれ、昔お前に言わなかつたか? 確か……お前が三歳じゆの話じや。」

「覚えているわけないだろ? ……で、それがどうした! 死んだ人間

に関係あんのかよ?「

爺さんは菜々美に耳打ちをする。するとどうだらうか、菜々美は驚いて俺のことを見上げ、わざと見ゆ田が違つてゐる。

「…………まさか、許婚とか言わないよな?」

「ふん、貴様に許婚など存在するわけがなかろう?この子はお前の妹じや。その昔、両親が死んだときに一緒に死んでしまつたのじや。」

「はあ、よかつた。許婚じゃないのか……え、爺さんは今、なんて言った?」

「い、妹? そんなの俺にいたのか?」

爺さんは頷く。そして、菜々美は俺に抱きつくる。

「お兄ちゃん!…」

「は……どうなつてんだ? 誰か教えてくれ……。

「……輝、い、お兄ちゃんになるんだぞ?」

「チヨイ待て! そんなの俺は知らないぞ! ……いつたいどうなつてんだよ! ! 説明しろ! !」

「いいか、輝……実のところはお前の両親はな、ある時、事故を起した。そのときお前はわしの道場にやつてきており、わしから拳法を教えてもらつていたのじや。その田はな、今までお前に黙

つていた妹のことを話すと両親は離すためにお前のもとに行こうとしたのじゃ。妹は重病じやつたがその病氣も治り、憧れのお兄ちゃんに会うために喜んでおつた。だが、事故で死んでしまい、両親はさつさと成仏してしまったのじゃ。だが、この世にすんごい未練があつた菜々美はここに残つたのじゃよ。」

「ぶつちやけいつて……俺の両親って意外に淡白な人だったのかもね？ 残された俺のことを特に未練だとおもわなかつたのだろうか……

「で、ここに残つた菜々美をわしは見つけたのじゃ。そして、血のつながつていると知つていながら……他人のふりをしてこの子を鍛えたのじゃ。輝と同じ拳法を教えてな。」

俺の体に顔をこすり付けていた菜々美は眠つてしまつたようだ。しかしそれ、そんなことを急に言われても困るのだが？ で、結局俺はどうなるのだろうか？

「爺さん、俺はどうすればいいんだ？」

「……一応、方法はあるが、まあ、とつあえず少しここで生活していくなさい。あるとしても今は無理だからな。」

そうだな、普段出来ないことをしておくれのもいいかもしない。これはこれで楽しんでおくことにしてよ。

「わかった。とつあえずここで生活させてもらひや。」

「……ううか、まあ、そんなことより飯にしようかの？」

そついえば・・・・」ハちにきて何も食べてなかつた。おなかが減つてたんだな俺も・・・・

「・・・・・白龍か・・・・・」

「?・・・・なんか言つたか爺さん?」

「なんでもない。爺の戯言じやよ。それより輝、面白いイベントハイーブイデイーとこづものがあるが、見るか?」

「・・・・・遠慮しておくれよ。」

「ちょっとなら大丈夫じやよ。」ハジにはお前さんを咎める葵とか言う竜もいないしな。たまにはどひづりじや?」

「いや、やめておく。」

なぜ、かたくなに俺がそういうたのか・・・・それは、なぜだか知らないが・・・・この会話を誰かが聞いているような気がしたからだ。気のせいならないのだが・・・もしも、もしもだが、俺が承諾してしまつて葵たちの耳に届いたら俺は呪はれることが、間違いなしだからだ。きっと、俺はいつか・・・みんなのところに戻つてみせるぞ・・・・

（完）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0699b/>

竜と書いてドラゴンと呼ぶ！

2010年10月29日12時50分発行